

## 『秘義分別撰疏』の考察(11)

千葉公慈\*

### — A Study about *Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā* (11) —

Koji CHIBA\*

#### 1. アーラヤ識縁起説をめぐる問題の所在

インド仏教の瑜伽行唯識学派における代表的典籍、『撰大乘論』(Mahāyāna-saṃgraha、以下MSと略称)は、人間の心理構造の根底にアーラヤ識(ālaya-vijñāna)という深層意識の基盤を想定する。本小論は、このMSに対する注釈書としてチベットに伝承される『秘義分別撰疏』(Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā<sup>\*i</sup>、以下VGPVと略称)を考察対象とするものである。すなわち我が国にほとんど伝承されることのなかったVGPVを著した瑜伽行唯識学派の思想系譜を探るために、アーラヤ識設定の隠された意図とその思想を開示せしめる貴重な手がかりを求め、VGPVに関するチベット語訳デルゲ版(No.4052)を底本として既に10回にたつて継続的に和訳<sup>\*ii</sup>を試みた続編である。

とりわけ前回の考察において判明したVGPVの縁起説の特色には、アーラヤ識が因果同時理論に基づく空間的把握の根拠として機能することを強調する点あげられる。それはまた『唯識三十頌』(Triṃśikāvijñaptiprakaraṇa、以下Triṃśikāと略称)<sup>\*iii</sup>の冒頭にも知られるうに、一切は認識

---

\*人文学部 日本文化学科

\*i Don gsang ba rnam par phyed ba bsdus te bshad pa (Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā) : Vivṛtti- in Derge ed. Vivṛta- in Peking ed.

\*ii 拙論『『秘義分別撰疏』覚え書(1)』『駒沢女子大学研究紀要』第8号所収、pp. 209-216

同『『秘義分別撰疏』覚え書(2)』『日本文化研究(駒沢女子大学日本文化研究所)』第4号所収、pp. 117-131

同『如来の所分別についての一考察—『秘義分別撰疏』覚え書(3)』『駒沢女子大学研究紀要』第9号所収、pp. 199-210

同『『秘義分別撰疏』における真如観について』平成15年度日本印度学仏教学会第54回学術大会(佛教学会)、2003. 9. 6、『印度学仏教学研究』第52巻所収。pp. 373-376

同『所分別と三昧について—『秘義分別撰疏』覚え書(4)』『駒沢女子短期大学研究紀要』第37号所収、pp. 79-85

同『唯識説における Buddha-vacana について—『秘義分別撰疏』の考察(5)—』『駒沢女子大学研究紀要』第11号所収、pp. 131-140

同『『秘義分別撰疏』の考察(6)—』『駒沢女子大学研究紀要』第12号所収、pp. 107-117

同『アーラヤ識縁起説における増益と損減—『秘義分別撰疏』の考察(7)—』『駒沢女子大学研究紀要』第13号所収、pp. 167-175

同『アーラヤ識の存在証明—『秘義分別撰疏』の考察(8)—』『駒沢女子大学研究紀要』第14号所収、pp. 131-140

同『アーラヤ識の存在について—『秘義分別撰疏』の考察(9)—』『駒沢女子大学研究紀要』第15号所収、pp. 103-114

同『『秘義分別撰疏』の考察(10)—』『駒沢女子大学研究紀要』第16号所収、pp. 117-127

\*iii Sylvain Lévi, *Vijñaptimatratasiddhi, Deux traités de Vasubandhu, Viṃśatikā accompagnée d'une explication en prose et Triṃśikā avec le commentaire de Sthiramati*, Paris, 1925.

のみであると説く唯識派では、根本教理の縁起説とは識の転変の意味であるとし、アーラヤ識（阿頼耶識）とマナス（末那識、*mano-vijñāna*）および六識（*ṣaḍ-vijñāna*）とが相互に因果となって転変することをさすアーラヤ識縁起説が基本的立場となる。確認すれば、それは *Triṃśikā* の第18偈に次の通りに示されている。

sarvabījaṃ hi vijñānaṃ pariṇāmas tathā tathā /  
yāty anyonyavaśād yena vikalpaḥ sa sa jāyate // *Triṃśikā* : K.18 // (Sylvain Lévi ed, 1925. p. 36)

何故ならば次の通りである。あらゆる〔日常の分別に基づいて判断されるものを存在たらしめる〕種子（しゅうじ、因子、*bīja*）を有する〔アーラヤ〕識が存在する。〔アーラヤ識とその他の七種の認識は〕変化しつつ生成していくときに、〔因と果が〕相互にはたらき合って展開していくのである。〔このような〕そのときそのときに、次のことがある。〔すなわち〕そのときそのときの〔日常的な〕分別が生成されるのである。（下線部は筆者）

すなわちアーラヤ識の存在が、下線部の主張に見られる通り本来的に因果異時であるべき様相の受け皿として、あらゆる存在を収斂する因果同時縁起説を支える理論的根拠となって示されたのである。そこには初期仏教における「Aがあるならば、Bある。Aがないならば、Bがない。（*kasmim asante na bhavanti h'ete*.<sup>\*iv</sup>）」という定型句を強く意識した表現、すなわち縁起説の読みかえとしての『阿毘達磨大乘經』（現存しない）の次なる偈文がアーラヤ識存在のための前提となった。

de yod pas na 'gro kun dang mya ngan 'das pa 'ng thob par 'gyur  
(VGPV : Der. ed., No. 4052, Ri, 306-b-2~3)

これ（アーラヤ識という基盤）があるからこそ、あらゆる〔迷いの〕生の境位（趣、*gati*）があり、また涅槃の獲得（*nirvāṇādhigama*）があるだろう。

VGPV ではこの偈文<sup>\*v</sup>をアーラヤ識の経証とし、敢えてMS本文の第1章第1節において提示しているが、そこをVGPVではさらなる強調として、ある意味で「縁起相由」的な意味合いにまで発展的に解釈していた。すなわち一と多は互いに相手の存在のための縁となりあうことによって縁起説全体を成り立たせ、かつ縁起説全体が一々を成立せしめるという因果の同時性を主張するのである。たとえば、一から多という数のすべてがあってこそ、一から多までの数体系が成り立ち、その中の一存在である一も多もそれぞれ成り立つとする見解である。該当するVGPVの主張を以下に見る。

kha cig ni sdun byas pa'i rgyur smra ba bas len la rang gi sde pa nyid dag la yang kha cig rgyu nisngal 'bras bu ni 'phyi bar<sup>\*vi</sup> rtog par byed de. 'di gnyig 'ng rgyu dang 'bras bu

<sup>\*iv</sup> *Sutta-nipāta*, PTS. 1885, New edition 1913. Reprint 1948, No. 869

後に縁起の定型句は次第にととのえられて、「これがあるとき、これがある。これが生起するから、これが生起する。これがないとき、これがない。これが滅するから、これが滅する。」として散見されるようになる。

imasmim sati idaṃ hoti, imass 'uppādā idaṃ uppajjati, imasmim asati idaṃ na hoti, imassa nirodhā idaṃ nirujjhati. (*Sumyutta-Nikāya*, Vol. 2, PTS. 1888, p. 28, Nidāna-saṃyutta)

<sup>\*v</sup> *anādikāliko dhatuḥ sarvadharmā-samāśrayaḥ /tasmin sati gatiḥ sarvā nirvāṇādhigamo'pi vā //*

(S. Lévi ed, *Triṃśikā*, p. 37, 1112-13)

「界は無始時来のものにして、一切法のよりどころである。これがあるから、一切の趣があり、また涅槃の獲得がある。」

<sup>\*vi</sup> 'bras bu ni 'phyi bar...bras bu na 'phyi bar (Pek ed)

dag snga phyi yodpa nyid du mngon par zhen to'das pa dang ma 'ongs pa'i rta ba ngan pa de dag bsal ba'i phyirchos rnam kun gyi 'dra ba'i gnas zhes bya ba gsungs so. dus ma nyam pa'i gnas ni 'dra ba'i gnaste. 'bras bu dang dus ma nyam du rgyu yod pa zhes bya ba'i don yin na de la yang nges par mizin te. la las<sup>\*vii</sup> rgyu dang 'bras bu'i dngos bo dus tha dad par yang khas blangs pa'i phyir ro. (VGPV : Der. ed., No. 4052, Ri, 307-b-3~4)

ある者たち（サーンキヤなど他学派）は、以前になされたこと [について] 原因とすることを主張命題とするが、自らの [唯識] 学派たちの中でもまた、ある者は因が先であるが、果は後のものという考えを [こだわって] なすのであって、これは両者（他学派と唯識派）がともに、あるいは因と果とに前後関係があるものとして、かたくなにとらわれるのである。過去と未来の [時間的前後関係があるという] かの劣った見解を否定するために、「一切法の等しいよりどころ (sarvadharmasamāśrayah)」<sup>\*viii</sup> といつて説かれたのである。同時のよりどころとは、等しいよりどころであって、すなわち果と同時に因が存在するという意味であるならば、それに関しても未だ把握（確定）されてはいないのである。何とならば、[残念ながら] ある者たちによっては、因と果の实事 (dravya) は異時のものであるとも [一般に] 承認されているからである。

このような因果同時の縁起説は、MS 本文においては「燈火の芯と炎のたとえ」や「蘆束のたとえ」として説明されている<sup>\*ix</sup>。すなわち縁起を相互依存関係と意味づけることで、本来的には不可逆であった因果関係を可逆的因果関係へとスライドせしめ、そのまま縁起の空間的理解に基づく因と果の同時成立へと導いている。相応する MS の相互依存の同時因果説を以下に見る。

復次阿頼耶識與彼雜染諸法。同時更互為因。云何可見。譬如明燈焰炷生燒同時更互。又蘆束互相依持同時不倒。應觀此中更互為因。道理亦爾。如阿頼耶識為雜染諸法因。雜染法亦為阿頼耶識因。唯就如是安立因緣。所餘因緣不可得故。

（無著『攝大乘論』No. 1594巻上「總標綱要分第一」大正蔵31, p. 134-c）

そのアラーヤ識（因）と、それら雜染のあらゆる存在（果）とは、同時の存在であり、相互依存として一つが他の因になると [MS I-14~15に] いわれるが、それはどのように理解されるべきであろうか。[答えて言うと] 例えば、燈火において炎が生ずること（果）と、芯が焼けること（因）とは、同時であり相互依存 [の関係] であるような如きある。また蘆束が同時に相互になって、一つが他に依存して倒れることがないような如きである。この場合もそれ

\*vii la las=kha cig

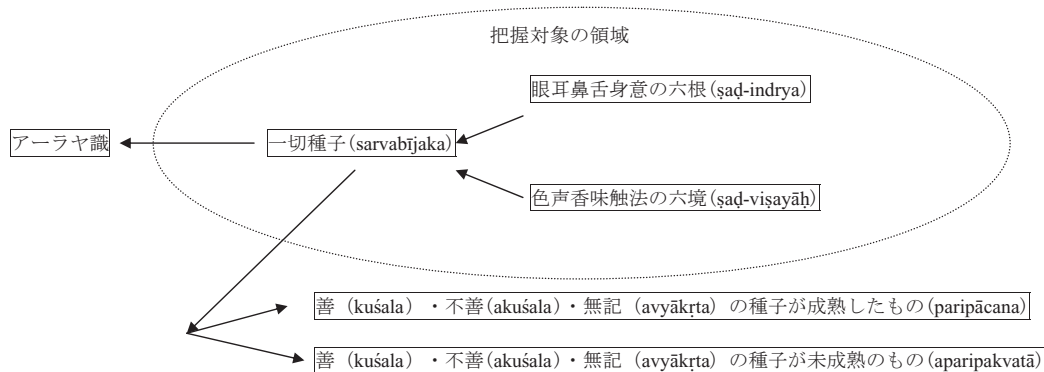
\*viii VGPV の著者にとっては、唯識学派は因果同時論こそが正しいという主張。異時の因果論については「過去と未来のかの劣った見解」として明確に否定対象とする。すなわちアラーヤ識が空間的理解であることと相応する。

\*ix 『中部』MN, III, p. 254や Prasannapādā, p. 558, l. 7, あるいは『大乘莊嚴經論』Sylvain Lévi, p. 154, l. 20にも「燈火の芯のたとえ」が散見される。また「蘆束のたとえ」とは、一本の蘆では折れやすく、また立ち上がることも出来ないが、複数の蘆を束ねて足を広げると、相互に支え合って立ち上がることが出来る。ちょうどカメラの三脚のように相互依存で成立する比喩は、そのまま縁起の空間的理解となる。今や多くの仏教書において縁起をただ単純に「関係性」あるいは「relativity」と解していることは大いに反省しなければならないが、例えば *Sumyutta-Nikāya* に縁起が説かれるときも、認識と名色（精神的存在と物質的存在）は相互に相俟って成立する同時依存の関係として頻りに説かれている場合があるので、問題は相当深刻である。『相応部』『蘆束經』, *Sumyutta-Nikāya*, Vol.2, PTS. 1888, p. 114, 『南伝大蔵經』13, pp. 165-166参照。

と同様に、相互依存として一つが他の因となると把握すべきである。アーラヤ識が雑染を有する諸存在の因であり、雑染の諸存在がまたアーラヤ識の因であるよに、正にそのようなあり方において、因と縁は安立されているのであり、その他に因縁は把握されていないのである。

## 2. アーラヤ識の把握対象の類別

このようにアーラヤ識は「無始時來の基盤 (dhātu、界)」としての機能を果たし、『阿毘達磨大乘經』のアーラヤ識縁起説の定型句に三性説を読み込むことによって、相互依存の同時因果縁起という理解から「一切諸法の平等なるよりどころ (sarva-dharma-samā-āśrayaḥ) である依他起性と、文字通りの“依他起”というその存在が限りなく重ね合っていくことになる。すなわち MS 本文の第 1 章第 2 節において示されている「あらゆる存在における一切種子の認識 (sarvadharmeṣu vijñānaṃsarvabījakam)」という概念の完成である。ただし VGPV では「あらゆる存在における (sarvadharmeṣu)」とは、ありとあらゆる雑染 (sarva-saṃkleśa) の諸法ということであり、所依 (ささえるもの、āśraya) と能依 (ささえられるもの、āsrita) の根拠 (基盤、dhātu) となるのがアーラヤ識という認識の存在である。そこで如何なる認識であれ、識である限りは把握されるべき対象が何であるのか、その定義が必要となるわけであるが、VGPV ではその把握対象を類別して以下の通りに示していた。



## 3. VGPV 試訳：Der. ed., No. 4052, Ri 308-a-6~308-b-6, Pek. ed, No. 5553, Li, 370-a-8~371-a-1

以上、アーラヤ識縁起説の特色とその定型句に関する考察に続き、今般はアーラヤ識の把握対象と認識の転変について、該当箇所を以下に試訳する。また巻末には本研究の関連資料として、梵文のステイラマティ (Sthiramati、安慧、470~550年頃) による注釈『唯識三十頌論』 (Triṃśikāvijñaptibhāya) のローマナイズを付す。上記にも見たように Triṃśikā は、『解深密経』 (Saṃdhi-nirmocā-sūtra) から『撰大乘論』 (Mahāyāna-saṃgraha) に至るまで、多くの論書が説示してき唯識説の根本思想について、わずか30の偈頌によってその大綱をまとめ上げた小品であり、後世に与えた影響という点では唯識文献中、最重要論典のひとつであるといえる。特に我が国では玄奘三蔵 (602~664年頃) によって将来されたダルマパーラ (Dharmapāla 護法、530~561年) の

注釈『成唯識論』(Vijñaptimātratāsiddhi-śāstra、漢訳のみ現存)が、慈恩大師窺基(632~682年)による注釈の『成唯識論述記』へと展開し、根本聖典となって法相唯識宗へと発展した歴史の意味は大きい\*<sup>x</sup>。したがって拙論では、インド唯識文献におけるステイラマティの思想として認識の変化に関する基本的見解を再考するために、付録としてステイラマティ訳『唯識三十頌論』のローマ字を続く次頁に提示する。筆者の今後の続編における検討資料となしながらも、また学生諸姉のテキストとして活用を期待するものである。

#### 凡 例

1) 試訳の底本は以下のデルゲ版を使用し、補足的に必要なに応じて北京版を利用した。

Der. ed., No. 4052, Ri, 296-b-1~361-a-7

: Tibetan Tripiṭaka, bstan 'gyur, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo, SENMS TSAM Vol. 12, 通帙第236(Ri)

Pek. ed., No. 5553, Li, 356-b-7~434-a-8

2) 本書のテキストMSにて言及されている部分は、「 」によって示した。

3) 重要な術語は、( )によってチベット訳を示した。また未確認ではあるが、おそらく誤りではなかろうと思われる還元のサンスクリット語についても、正確な文脈を把握するため、同様に( )によって加筆した。

4) 原文にはないが、補った方が理解に便と思われる言葉は[ ]によって示した。

5) なるべく原文に忠実な直訳を試み、日本語として不自然な文章表現も[ ]によって整えて、直訳はそのまま残した。

#### 【認識の転変について】

[アーラヤ識の把握対象は如何なるものであるかといえ、①種子と、②眼耳鼻舌身意の六根(ṣaḍ-indrya)、および③色声香味触法の六境(ṣaḍ-viṣayāḥ)である。②の種子にはさらに2種があり、善(kuśala)・不善(akuśala)・無記(avyākṛta)の種子が成熟したもの(paripācana)と、未だ成熟していないもの(aparipakvatā)である。それら2種の種子は、いずれも三界におけるアーラヤ識の把握対象であるが、その一方で②「眼等」(眼耳鼻舌身意の六根)および③「色等」(色声香味触法の六境)は、[三界のうちの]欲界と色界だけ[にあるもの]なのである。「眼等」といわれることもまた、およそどのような眼等であるのかといえ、眼等の種子が未だ成熟していないものが、無始の輪廻以来とどまって[蓄積されて]いる場合、[それらが]およそ成熟することになるその時にこそ、「眼等」[という六根]であるといわれるのである。また、どのように成熟したものとなるのか、といえ、「眼等」が完成することになる[その]業(行為としてのほたらき)は、[縁起説に見る]「存在の支分の薫習」(有支薫習、bhavaṅga-vāsanā)や、および「眼が眼である」といわれることから、「身が身である」といわれるに至るまでの「明確に言語表現された薫習」(明

\*x 護法のほか、現存する注釈文献としては、ステイラマティの注釈がサンスクリット原典ならびにチベット訳(Der ed, No.4064)があり、さらなる複注としてヴィニータデーヴァ(Vinītadeva、調伏天)のチベット訳(Der ed, No. 4065)も知られる。ちなみにステイラマティの注釈には、和訳として宇井伯寿『安慧護法唯識三十頌』があり、また『大乘仏典15・世親論集』(中央公論社)に所収の荒牧典俊訳「唯識三十論」などがある。そしてヴィニータデーヴァの複注和訳には、野沢静証「唯識三十頌の原典解釈」『世親唯識の原典解明』(pp. 133~408)が知られる。



言薫習、abhilāpa-vāsanā)にも依存して、およそ何時であれ、欲界・色界において青等という諸々の認識の増上縁 (adhipati-pratyaya) のあり方として変化 (転変、parināma) する時こそ、「成熟したもの」といわれるのである<sup>\*xi</sup>。また同様に、諸々の成熟した種子は、眼等の五つの認識において、どのような限定 (差別) がなされたのかといえ、暫時、善と不善と無記の種子から眼識が善と不善と無記のあり方 (本質) として生起する場合、眼の成熟したもの (paripāka) が [色以外の] 声 [香味触法] 等の対象領域において排除されることによって、自ら [眼の] 対象領域に生起するという差別 (限定) をなすのである。また [これから未来において] 見られるであろう (経験されるであろう) 「有支薫習」である眼が、種子に対して一体どんなことをなしたならば、「成熟したものとなす」といわれるのかといえ、善趣 (sugati) と悪趣 (durgati) のあり方 (本質) として作用をなすことに関して、次の通りにいわれるのである。[すなわち] 「眼は眼である」という「明言薫習」の力 (威力、prabhāva) に依るならば、如何なるあり方であれ、必ずそれは「眼は眼 [である]」とって術語表現する原因となるので、そのようなあり方として眼によって種子は変化 (転変) するであろう。眼識についていえば、「眼識は眼識である」という「明言薫習」のかの差別 (特殊性) と、「色は色である」という「明言薫習」のかの差別 (特殊性) とから、[眼識というものが] それぞれ能取に固執し、そして所取に固執することの原因となるように、まったくそのように [自らも] 変化 (転変) することになるのであって、以下も同様に耳識 [鼻識・舌識・身識・意識] 等においてもまた、この [識が転変するという] 考えが いわれるのである。

#### 4. 安慧釈『唯識三十頌論』(付録)

Sylvain Lévi ed, *Vijñaptimātratāsiddhi*, Deux traités de Vasubandhu, *Vimśatikā* accompagnée d'une explication en prose et *Trimśikā* avec le commentaire de Sthiramati, Paris, 1925.

(p. 15) atha trimśikāvijñaptibhāṣyaṁ

pudgaladharmanairātmyayor apratipannavipratipannānām aviparītapudgaladharmair ātmyapratipādanārtham trimśikāvijñaptiprakaraṇārāmbhaḥ /

pudgaladharmanairātmyapratipādanam punaḥ kleśajñeyāvaraṇaprahāṇārtham /

thatā hy ātmadṛṣṭiprabhavā rāgādayaḥ kleśāḥ /

pudgalanairātmyāvabodhaśca satkāyadrṣṭeḥ pratipakṣatvāt tatprahāṇāya pravartamānaḥ sarvakleśān prajahāti /

dharmanairātmyajñānād api mokṣasarvajñatvādhigamārtham /

kleśā hi mokṣaprāpter āvaraṇam iti atas teṣu prahīṇeṣu mokṣo 'dhigamyate /

jñeyāvaraṇam api sarvasmin jñeye jñānapravṛttipratibandhabhūtam akliṣṭam ajñānam /

<sup>\*xi</sup> 「有支薫習 (bhavaṅga-vāsanā)」と「明言薫習 (abhilāpa-vāsanā)」については、アーラヤ識自身の分類を示した MS 本文の I-58 に説かれている。ただし MS はこれに「我見薫習 (atmadṛṣṭi-vāsanā)」を加えて三種の分類とする。「有支薫習」とは、業に基づいて輪廻している存在としての習気で、十二縁起として説かれるので「有支」という。「明言薫習」とは、実際の文字や数字、言語はもちろんのこと、思考する上での判断や認識、概念や名称も含めた言語全般の習気である。「我見薫習」とは、雑染の意に基づく我執の習気で、これら三種からなるアーラヤ識は無始時來に蓄積されているという。また *Trimśikā*: K-19 と、同箇所に関連する『成唯識論』八 (pp. 12-13) には、三種の薫習が説かれている。長尾雅人『撰大乘論・和訳と注解・上』講談社、昭和57年、pp. 251-252による。

tasmin prahīṇe sarvākāre jñeye 'saktam apratihataṁ ca jñānaṁ pravartata ity atah sarvajñatvam  
adhigamyate /

atha vā dharmapudgalābhiniviṣṭās cittamātraṁ yathābhūtaṁ na jānanti ato dharmapudgalanairāt  
myapradarśanena saphale vijñaptimātre 'nupūrveṇa praveśārthaṁ prakaraṇārambhaḥ /

atha vā vijñānēva dvijñeyam api dravyata evēti kecin manyante /

vijñeyavad vijñānam api saṁvṛtita eva na paramārthata ity asya dviprakārasyaapy ekāntavādasya  
pratiśedhārthaḥ

prakaraṇārambhaḥ //

ātmadharmôpacāro hi vividho yaḥ pravartate / (K.lab)

likāśāstrayor iti vākyaśeṣaḥ /

vijñānapariṇāme 'sau (K.lc)

ātmadharmopacāra ity sambadhyate /

ātmā dharmās cōpacaryanta ity ātmadharmôpacāraḥ /

sa punarātmavijñaptir dharmaprajñaptis ca /

vividha ity anekaprakāraḥ /

ātmā jīvo jantur manuḥ mānava ity evam ādika ātmopacāraḥ skandhā dhātava

āyatanāni rūpaṁ vedanā saṁjñā saṁskārā vijñānam ity evam ādiko dharmopacāraḥ /

ayaṁ dviprakāro 'py upacāro vijñānapariṇāma eva na mukhye ātmani dharmeṣu vēti kuta etat /

dharmnāṁ ātmanaś ca vijñānapariṇāmād (p. 16) bahirabhāvāt /

ko 'yaṁ pariṇāmo nāma / anyathātvaṁ /

kāraṇakṣaṇanirodhasamakālah kāraṇakṣaṇavilakṣaṇaḥ kāryasyātmalābhah pariṇāmaḥ /

tatrātmādivikalpavāsanāparipoṣād rūpādivikalpavāsanāparipoṣāc cālayavijñānād ātmādinirbhāso  
vikalpo rūpādinirbhāśāś cōtpadyate /

tam ātmādinirbhāsaṁ rūpādinirbhāsaṁ ca tasmād vikalpād bahirbhūtam ivôpādāyātmādyupacāro  
rūpādidharmopacāraś cānādikālikah pravartate vināpi bāhyenātmanā dharmāis ca /

tadyathā taimirikasya keśôṅḍukādyupacāra ti /

yacca yatra nāsti tat tatrôpacaryate /

tad yathā bāhīke gauḥ /

evaṁ vijñānasya rūpe bahis cātmadharmābhāvāt parikalpita evātmā dharmās ca na tu paramārthataḥ  
santīti vijñānavad vijñeyam api dravyata evēty ayam ekāntavādo nābhyupeyaḥ /

upacārasya ca nirādhārasyāsāmbhavād avāśyaṁ vijñānapariṇāmo vastuto 'stīti

upagantavyo yatrātmadharmopacāraḥ pravartate /

ataś cāyam upagamo na yuktikṣamo vijñānam api vijñeyavat saṁvṛtita eva na paramārthata ity /

saṁvṛtito 'py abhāvaprasaṅgāt, na hi saṁvṛtir nirūpādānā yujyate /

tasmād ayam ekāntavādo dviprakāro 'pi niryuktikatvāt tyājya ity ācāryavacanam /

evaṁ ca sarvaṁ vijñeyaṁ parikalpitasvabhāvāt vād vastuto na vidyate vijñānaṁ punaḥ  
pratītyasamutpannatvād dravyato 'stīty abhyupeyaṁ /

pratīyasamutpannatvaṁ punar vijñānasya pariṇāmasābdena jñāpitaṁ /  
 katham etad gamyate vinā bāhyenārthena vijñānam evārthākāram utpadyata iti /  
 bāhyo hy arthaḥ svābhāsavijñānanakatvena vijñānasyāḷambanapratyaya iṣyate na tu  
 kāraṇatvamātreṇa samanantarapratyayādiviśeṣāprasaṅgāt /  
 saṁcitāḷambanās ca pañcavijñānakāyās tadākāratvāt /  
 na ca saṁcitam avayavasamhatimātrād anyad vidyate /  
 tadavayavān apohya saṁcitākāravijñānābhāvāt /  
 tasmād vināiva bāhyenārthena vijñānam saṁcitākāram utpadyate /  
 na ca paramāṇava eva saṁcitās tasyāḷambanaṁ paramāṇūnām atadākāratvāt /  
 na hy asaṁcitāvasthātaḥ saṁcitāvasthāyāṁ paramāṇūnām kaścīd ātmātīśayaḥ /  
 tasmād asaṁcitavat saṁcitā api paramāṇavo nāivāḷambanaṁ /  
 anyas tu manyate /  
 ekaikaparamāṇur anyanirapekṣyo 'tīndriyo bahavastu parasparāpekṣyā indriyagrāhyāḥ /  
 teṣāṁ api sāpekṣanirapekṣāvasthāyor ātmātīśayābhāvād ekāntenēndriyagrāhyatvam atīndriyatvaṁ  
 vā /  
 yadi ca paramāṇava eva parasparāpekṣā vijñānasya viśayībhavanti /  
 evaṁ sati yo 'yaṁ ghaṭakuḍyādyaḥkārabhedo vijñāne sa na syāt paramāṇūnām atadākāratvāt /  
 na cānyanirbhāsasya vijñānasyānyākārā viśayo yujyate 'tiprasaṅgāt /  
 na ca paramāṇavaḥ stambhādivat paramārthataḥ santi /  
 arvāṇmadhyaparabhāgasadbhāvāt /  
 tadanabhyupagame vā pūrvadakṣiṇāparōttarādīdig(P. 17)bhedo yaḥ sa paramāṇor na syāt /  
 nta taś ca vijñānavat (/)  
 paramāṇor apy amūrtatvam adeśasthatvaṁ ca prasahyate /  
 evaṁ bāhyārthābhāvād vijñānam evārthākāram utpadyate /  
 svapnavi jñānavad ity abhyupeyaṁ /  
 vedanādayo 'pi nātīta-nāgatās tadākāravi jñānanakanā niruddhājātavāt /  
 na ca vartamānā vartamānanakanā utpadyamānavasthāyām asattvād utpannāvasthāyāṁ  
 vijñānasyāpi tadākāreṇōtpannatvān na kimcit kartavyam astīti manovijñānam apy anāḷambanam  
 evōtpadyate /  
 anyas tv āha /  
 asaty ātmani mukhye dharmeṣu cōpacāro na yujyate /  
 upacāro hi triṣu bhavati nānyatamābhāve mukhyapadārthe tatsadṛṣe 'nyasmin viśaye tayoś ca  
 sādṛṣye /  
 tad yathā mukhye 'gnau tatsadṛṣe ca māṇavake tayoś ca sādḥāraṇe dharme kapilatve tikṣṇatve vā  
 saty agnir māṇavaka ity upacāraḥ kriyate /  
 atra hy agnir māṇavaka iti jātir dravyaṁ vōpacaryate /  
 ubhayathāpy upacārābhāvaḥ /



tatra tāvanna jāteḥ sādharmaṇaṁ kapilatvaṁ tikṣṇatvaṁ vā /  
 na ca sādharmaṇadharmābhāve māṇavake jāter upacāro yujyate 'tiprasaṅgāt /  
 ataddharmatve 'pi jāteḥ (/)  
 tikṣṇatvakapilatvayor jātyavinābhāvitvān māṇavake jātyupacāro bhaviṣyati /  
 jātyabhāve 'pi tikṣṇatvakapilatvayor māṇavake darśanād avinābhāvitvam ayuktam /  
 avinābhāvitve cōpacārābhāvo 'gnāv iva māṇavake 'pi jātisadbhāvāt /  
 tasmāna māṇavake jātyupacāraḥ sambhavati /  
 nāpi dravyōpacāraḥ sāmānyadhamābhāvāt /  
 na hi yo 'gnes tikṣṇo guṇaḥ kapilo vā sa eva māṇavake /  
 kiṁ tarhi tato 'nyaḥ /  
 viśeṣasya svāśrayapratibaddhatvān na vināgniguṇenāgner māṇavake upacāro yuktaḥ /  
 agniguṇasādṛśyād yukta iti cet /  
 evam apy agniguṇasyāiva tikṣṇasya kapilasya vā māṇavakaguṇe tikṣṇe kapile vā sādṛśyād upacāro  
 yukto na tu māṇavake 'gner guṇasādṛśyenāsambandhāt /  
 tasmād dravyōpacāro 'pi nāiva yujyate /  
 mukhyo 'pi padārtho nāsti tatsvarūpasya sarvajñānābhīdhānaviṣayātīkrāntatvāt /  
 pradhāne hi guṇarūpeṇāiva jñānābhīdhāne pravartete tatsvarūpāsamsparśāt /  
 anyathā ca guṇavaiyarthyprasaṅgaḥ /  
 na hi jñānābhīdhānavyatirikto 'nyapadārthasvarūpaparicchityupāyo 'stīty ataḥ pradhānasvarūpaviṣa  
 yajñānābhīdhānābhāvān nāiva mukhyaḥ padārtho 'stīty avagantavyaṁ /  
 evaṁ yāvaccabde sambandhābhāvāj jñānābhīdhānābhāvāḥ, evaṁ cābhīdhānābhīdheyaabhāvān  
 naiva mukhyaḥ padārtho 'sti /  
 api ca sarva evāyaṁ gauṇa eva na mukhyo 'sti /  
 gauṇo hi nāma yo yatrāvidyamānena rūpeṇa pravartate /  
 sarvaś ca śabdaḥ pradhāne 'vidyamānenāiva guṇarūpeṇa pravartate ato mukhyo (p. 18) nāsty eva /  
 tatra yad uktaṁ asaty ātmani mukhye dharmeṣu cōpacāro na yukta iti tadayuktaṁ /  
 vijñānapariṇāmaḥ katibheda iti na jñāyate /  
 atas tatprabhedōpadarśanārtham āha /  
 pariṇāmaḥ sa ca tridhā // (K.I d)  
 yatrātmādyupacāro dharmōpacāraś ca /  
 sa punarhetubhāvena phalabhāvena ca bhidyate /  
 tatra hetupariṇāmo yālayavijñāne vipākaniṣyandavāsanāparipuṣṭiḥ /  
 phalapariṇāmaḥ punar vipākavāsanāvṛttīlābhād ālayavijñānasya pūrvakarmākṣepaparisaṁāpto yā  
 nikāyasabhāgāntarṣv abhinirvṛttiḥ /  
 niṣyandavāsanāvṛttīlābhāc ca yā pravṛttivijñānānāṁ kliṣṭasya ca manasa ālayavijñānād abhinirvṛttiḥ /  
 tatra pravṛttivijñānaṁ kuśalākuśalam ālayavijñāne vipākavāsanāṁ niṣyandavāsanāṁ cādhatte /  
 avyākṛtaṁ kliṣṭaṁ ca mano niṣyandavāsanāṁ eva /

yo 'sau trividhaḥ pariṇāma ukto 'sāv api na jñāyate /  
atas tadbhedapradarśanārtham āha /

vipāko mananākhyas ca vijñaptir viṣayasya ca / (K.2 ab) iti /  
sa eṣa trividhaḥ pariṇāmo vipākākhyo mananākhyo viṣayavijñaptiākhyas ca /  
tatra kuśalākuśalakarmavāsanāparipākavaśād yathākṣepaṃ phalābhinirvṛttivipākaḥ /  
kliṣṭaṃ mano nityaṃ mananātmakatvāt mananākhyam /  
rūpādviṣayapratyavabhāsatvāt cakṣurādivijñānaṃ ṣaṭprakāram api viṣayavijñaptiḥ /  
tatsvarūpanirdeśam antareṇa na tat pratīyate ity ato yasya yat svarūpaṃ tad yathākramaṃ  
pradarśayannāha /

tatrālayākhyam vijñānaṃ vipākaḥ sarvabījakam // (K.2 cd)  
iti /

tatrēti yo 'yam anantarōktaḥ trividhaḥ pariṇāmaḥ /  
ālayākhyam ity ālayavijñānaśarīrakaṃ yad vijñānaṃ sa vipākapariṇāmaḥ /  
tacca sarvasāmkleśikadharmabījasthānatvād ālayaḥ /  
ālayaḥ sthānam iti paryāyau /  
atha vāliyante upanibadhyanṭe 'smin sarvadharmāḥ kāryabhāvena /  
tadvāliyanṭe upanibadhyante kāraṇabhāvena sarvadharmeṣv ity ālayaḥ /  
vijñānātīti vijñānaṃ /  
sarvadhātugati(p. 19)yonijātiṣu kuśalākuśalakarmavipākatvād vipākaḥ /  
sarvadharmabījāśrayatvāt sarvabījakaṃ /  
yadi pravṛttivijñānavyatiriktam ālayavijñānam asti tato 'syāmbanam ākāro ca vaktavyaḥ /  
na hi nirāmbanaṃ nirākāraṃ vā vijñānaṃ yujyate /  
nāiva tan nirāmbanaṃ nirākāraṃ vēṣyate /  
kiṃ tarhy aparicchinnāmbanaṃ kāraṃ / kiṃ kāraṇam /  
yasmād ālayavijñānaṃ dvidhā pravartate /  
adhyātmam upādānavijñaptito bahirdhā 'paricchinnākārabhājanavijñaptiś ca /  
tatrādhyātmam upādānaṃ parikalpitasvabhāvābhiniveśavāsanā sādhiṣṭhānam indriyarūpa nāma ca /  
asyāmbanasyātisūksmatvāt /

asaṃviditakōpādīsthānavijñaptikaṃ ca tat / (K.3 ab)  
asaṃviditaka upādir yasmin asaṃviditakā ca sthānavijñaptir yasmin tadālayavijñānaṃ asaṃviditakō  
pādīsthānavijñaptikaṃ /  
upādānam upādīḥ /  
sa punar ātmādivikalpavāsanā rūpādīdharmavikalpavāsanā ca /  
tatsadbhāvād ālayavijñānenātmādivikalpo rūpādivikalpaś ca kāryatvenōpātta iti tadvāsanātmādivikalpānām  
rūpādivikalpānām cōpādir ity ucyate /  
(so) asmīn idam tad iti pratisaṃvedanākāreṇāsaṃvidita ity atas tadasaṃviditakōpādir ity ucyate /  
āśrayōpādānaṃ cōpādīḥ /

āśraya ātmabhāvaḥ /  
 sādhiṣṭhānam indriyarūpaṁ nāma ca /  
 tasya punar yad upādānam upagamanam ekayogaḥśematvena tadupādīḥ /  
 tatra kāmarūpadhātvor dvayor nāmarūpayor upādānaṁ /  
 ārūpyadhātau tu rūpavitarūgatvād rūpavipākānabhīrivr̥tter nāmōpādānam eva/  
 kiṁ tu vāsanāvastham eva tatra rūpaṁ na vipākāvastham /  
 tat punar upādānam idaṁtayaḥ pratisaṁvedayitum aśakyam ity ato 'saṁvidita ity ucyate/  
 sthānavijñaptir bhājanalokasaṁniveśavijñptiḥ /  
 sāpy aparicchinnāmbanākāraṁ bhaviṣyatīti /  
 anyavijñānavādinām api nirodhasamāpattīdyavasthāsu tulyam etan na ca nirodhasamāpattīdyavasthāsu  
 vijñānaṁ nāivāstīti śakyate pratipattum /  
 yuktivirodhāt sūtravirodhāc cēti /  
 tatrālayākhyāṁ vijñānam ity uktaṁ vijñānaṁ cāvaśyaṁ cāitaiḥ saṁprayuktam ity ato vaktavyāṁ  
 katamaiḥ katibhiś ca taccāittaiḥ sadā saṁprayujyate /  
 tathā kiṁ taiḥ sarvadā saṁprayujyate /  
 uta nēty ata āha /

sadā sparśamanaskāravitsaṁjñācetanānvitam // (K.3 cd)

(p. 20) iti /

sadēti yāvadālayavijñānaṁ tāvadebhiḥ sparśamanaskāravedanāsaṁjñācetanākhyaiḥ pañcabhiḥ  
 sarvatragair dharmair anvitam /  
 vedanaṁ vit /  
 tatra sparśas trikaṣaṁnipāte indriyavikāraparicchedaḥ vedanāsaṁnīśrayakarmakaḥ /  
 indriyaviśayavijñānāni trīṇy eva trikaṁ tasya kāryakāraṇabhāvena samavasthānaṁ trikaṣaṁnipātaḥ /  
 tasmin sati tatsamakālam evēndriyasya sukhaduḥkhādivedanānukūlo yo vikāras tena sadṛśo  
 viśayasya sukhādivedanīyākāraparicchedo yaḥ sa sparśaḥ /  
 indriyaṁ punar yena viśeṣeṇa sukhaduḥkhādihetutvaṁ pratipadyate sa tasya vikāraḥ /  
 sparśaḥ punar indriyavikārasādṛśyenēndriyaṁ spr̥śatīndriyeṇa vā spr̥śyate iti sparśa ucyate /  
 ata eva viśayavikāraparicchedātmako 'pīndriyavikārapariccheda uktaḥ /  
 vedanāsaṁnīśrayatvam asya karma /  
 evaṁ hy uktaṁ sūtre sukhavedanīyaṁ sparśaṁ pratīyōtpadyate sukhaṁ veditam iti vistarāḥ /  
 manaskāraścetasā ābhogaḥ /  
 abhujanamābhogaḥ /  
 ālambane yena cittam abhimukhīkriyate /  
 sa punar ālambane cittadhāraṇakarmā /  
 cittadhāraṇaṁ punas tatrāivāmbane punaḥ punaś cittasyāvarjanaṁ /  
 etacca karma cittasaṁtater ālambananiyamena viśiṣṭaṁ manaskāraṁ adhikṛtyōktaṁ na tu yaḥ  
 pracittakṣaṇaṁ /

tasya hi pratikṣaṇam eva vyāpāro na kṣaṇāntare /  
 vedanā anubhavasvabhāvā /  
 sā punarviśayasyāhlādakaparitāpakatadubhayākāraviviktasvarūpasākṣātkaraṇabhedāt tridhā bhavati /  
 sukhā / duḥkhā / aduḥkhāsukhā ca / evaṁ tv anye manyante /  
 śubhāśubhānām karmaṇām sukho 'nubhavaḥ phalavipākaṁ pratyanubhavanty anenēty anubhavaḥ /  
 tatra śubhānām karmaṇām sukho 'nubhavaḥ phalavipākaḥ /  
 aśubhānām duḥkhaḥ / ubhayeṣāṁ aduḥkhāsukhaḥ /  
 atra cālayavijñānam eva śubhāśubhakarmavipākaḥ /  
 tatsaṁprayuktāivōpekṣā paramārthataḥ śubhāśubhānām karmaṇām karmaṇām phalavipākaḥ /  
 sukhaduḥkhayos tu kuśalākuśalakarmavipākajativād vipākōpacāraḥ /  
 tatra sukho 'nubhavaḥ yasminn utpanne viyogecchā niruddhe ca (p. 21) punar asaṁyogecchā /  
 aduḥkhāsukho yasminn utpanne niruddhe cōbhayaṁ na jāyate /  
 saṁjñā viśayanimittdgrahaṇam / viśaya ālambanam /  
 nimittam tadviśeṣo nīlapitādyaālambanavyavasthākāraṇam /  
 tasyōdgrahaṇam nirūpaṇam nīlam etan na pītam iti/  
 cetanā cittābhisaṁskāro manasaś ceṣṭā /  
 yasyām satyām ālambanam prati cetasaḥ praspanḍa iva bhavati ayaskāntavaśādayaḥ praspanḍavat //  
 vedanā trividhā sukhā duḥkhā aduḥkhāsukhā ca /  
 dharmāś catuḥprakārāḥ kuśalā akuśalā anivṛtāvyaḥkṛtā nivṛtāvyaḥkṛtās ca /  
 tatrālayavijñāne viditi sāmānyōpadeśena na vijñāyate tisṛṇām vedanānām katamā vedanā /  
 tathā tadapi kim kuśalam akuśalam anivṛtāvyaḥkṛtam nivṛtāvyaḥkṛtam iti na vijñāyata ity ata āha /  
 upekṣā vedanā tatrānivṛtāvyaḥkṛtam ca tat / (K.4 ab)  
 tatrēty ālayavijñānam eva prakṛtatvāt sambadhyate /  
 upekṣāivālayavijñāne vedanā na sukhā na duḥkhā tayoḥ paricchinṇālambanākāratvāt /  
 rāgadveśānuśayitatvācca /  
 anivṛtāvyaḥkṛtam ca tat ālayavijñānam iti prakṛtam /  
 tatrānivṛtagrahaṇam nivṛtavayavacchedārtham /  
 avyaḥkṛtagrahaṇam kuśalākuśalavyavacchedārtham /  
 manobhūmikair āgantukair upakleśair anāvṛtatvād anivṛtam /  
 vipākatvād vipākaṁ prati kuśalākuśalatvenāvyaḥkaraṇād avyaḥkṛtam /  
 tathā sparśādayaḥ (K.4 c)  
 yathā ālayavijñānam ekāntena vipāko 'paricchinṇālambanākāram sadā sparśādibhir anvitam /  
 tatra cōpekṣāiva vedanānivṛtāvyaḥkṛtam ca /  
 tathā sparśādayo 'py ekāntena vipākā evāparicchinṇālambanākārās ca /  
 ātmānam hitvā itaraiś caturbhir ālayavijñānena ca nityam anugatās teṣu cōpekṣāiva vedanā  
 anivṛtāvyaḥkṛtās cālayavijñānavat /  
 na hi vipākena saṁprayuktānām avipākatvam aparicchinṇālambanākāreṇa ca paricchinṇālambanākāratvam

saṁbhavati /

evam anyatrâpi vācyam //

kiṁ punas tadālayavijñānam ekam abhinnaṁ āsarṁsāram anuvartate /

uta saṁtānena / na hi tadekam abhinnaṁ anuvartate kṣaṇikatvāt /

kiṁ tarhi /

tacca vartate srotasaughavat // (K.4 d)

(p. 22) taccēty ālayavijñānam eva saṁbadhyate /

tatra sroto hetuphalayor nairantaryeṇa pravṛttiḥ /

udakasamūhasya pūrvāparabhāgāvicchedena pravāha ogha ity ucyate /

yathā hy oghas trṇakāṣṭhagomayādīn ākarṣayan gacchati evam ālayavijñānam api puṇyāpuṇyaniñjy

akarmavāsanānugataṁ sparśamanaskārādīn ākarṣayat srotasāsarṁsāram avyuparataṁ pravartata iti //

tasyāivaṁ srotasā pravṛttasya kasyām avasthāyām vyāvṛttir ity āha /

tasya vyāvṛttir arhatve (K.5 a)

kiṁ punar arhatvaṁ yad yogād arhann ity ucyate /

kasya punar yogād arhann ity ucyate /

kṣayajñānānutpādajñānalābhāt /

tasyām hy avasthāyām ālayavijñānāśritadauṣṭhulyaniravaśeṣaprahāṇād ālayavijñānaṁ vyāvṛttaṁ

bhavati / sâiva cārhadavasthā /

uktaḥ savibhāgo vipākapariṇāmaḥ /

idānīm mananākhyaṁ dvitīyaṁ pariṇāmam āha /

tadāśritya pravartata iti vistaraḥ /

tatra yathā cakṣurādivijñānānām cakṣurādaya āśrayatvena rūpādayś cālambanatvena prasiddhāḥ /

nāivaṁ kliṣṭasya manasa āśraya ālambanaṁ vā prasiddham /

na ca vijñānam āśrayālanbananirapekṣaṁ yujyata ity atah kliṣṭasya manasa āśrayālanbanapratipādanārthaṁ

niruktipratipādanārthaṁ cāha /

tadāśritya pravartate /

tadālanbanam manonāma vijñānam mananātmakam // (K.5 bcd)

tadāśritya pravartata iti tacchabdenālayavijñānam abhisāmbadhyate /

tadvāsanāśrayo hy ālayavijñānam atas tadāśritya pravartate saṁtānenōtpadyata ity arthaḥ /

atha vā yasmin dhātau bhūmau vālayavijñānaṁ vipākas tad api kliṣṭaṁ manas taddhātukaṁ

tadbhūmikaṁ cēti tatpratibaddhavṛttivāt tadāśritya pravartate /

tadālanbanam iti ālayavijñānālanbanam eva /

satkāyadrṣṭyādibhiḥ saṁprayogād ahaṁ mamēty ālayavijñānālanbanatvāt /

kathaṁ punar yata eva cittād utpadyate tadevālanbanam tad bhavati /

yathā tadanicchatām keṣāṁcīd kasyāmcīd avasthāyām yata eva cittān manovijñānam utpadyate

tadālanbanam eva tadutpadyate /

manonāma vijñānam iti mana iti nāma ākhyaḥ yasya vijñānasya tad ālayavijñānam āśritya pravartate

tadālabanam ca /  
manonāma ity anenālayavijñānāt pravṛttivijñānāc ca vyavacchinatti /  
tat punaḥ kiṁsvabhāvam ity āha /  
mananātmakam iti /  
evam mananātmakatvān mana ity ucyate nairuktena vidhinā //  
vijñānasvarūpatvād avāśyam taccaittaiḥ saṁprayujyate /  
(p. 23) idam tu na jñāyate katamais taccaittaiḥ kiyadbhiḥ kiyantaṁ kālaṁ vā saṁprayujyata ity ata  
āha /

kleśaiś caturbhiḥ sahitaṁ nivṛtvāyākr̥taiḥ sadā / (K.6 ab)  
caittā hi dviprakārāḥ kleśās tadanye ca /  
tadanyebhyo vyavacchedārtham āha kleśair iti /  
kleśā api ṣaṭ /  
na ca taiḥ saṁprayujyate 'taś caturbhir ity āha /  
sahitam iti saṁprayuktam / kleśā api dvividhāḥ /  
akuśalā nivṛtvāyākr̥tās ca /  
akuśalebhyo viśeṣārtham āha nivṛtvāyākr̥tair iti /  
na hi nivṛtena vijñānenākuśalānāṁ saṁprayogaḥ sambhavati /  
nivṛtāḥ kliṣṭavāt /  
avyākr̥tāḥ kuśalākuśalatvenāvyākaraṇāt / sadēti sarvakālaṁ /  
yāvat tad asti tāvat taiḥ saṁprayuktam //  
sāmānyanirdeśād viśeṣato na jñāyanta iti viśeṣato nirdiśati /

ātmadr̥ṣṭyātmamohātmamānātmāsnehasaṁjñitaiḥ // (K.6 cd)  
sāmānyanirdeśād viśeṣato na jñāyanta iti viśeṣato nirdiśati /

ātmadr̥ṣṭyātmamohātmamānātmāsnehasaṁjñitaiḥ // 6cd //  
upādānaskandheṣv ātmēti darśanam ātmadr̥ṣṭiḥ satkāyadr̥ṣṭir ity arthaḥ /  
moho 'jñānam / ātmany ajñānam ātmamohaḥ /  
ātmaviṣaye māna ātmamāno 'smimāna ity arthaḥ /  
ātmani sneha ātmasnena ātmapremēty arthaḥ /  
tatrālayavijñānasvarūpe saṁmūḍhaḥ sannālayavijñāne ātmadr̥ṣṭim utpādayati /  
ātmadarśanād yā cittasyōnnatiḥ so 'smimānaḥ /  
etasmimś traye sati ātmābhimate vastuni yo 'bhiṣvaṅgaḥ sa ātmasnehaḥ //  
āha ca /

avidyayā cātmadr̥ṣṭyā cāsmimānena tṛṣṇayā /  
ebhiś caturbhiḥ saṁkliṣṭaṁ mananālakṣaṇaṁ manaḥ //  
viparyāsanimittaṁ tu manaḥ kliṣṭaṁ sadāiva tat /  
kuśalāvyākr̥te cite sadāhaṅkāraṅgaṇam //

ete hi



ātmamohādayaḥ kleśā manovannavabhūmikāḥ /  
iha ca sāmānyenābhidhānān na jñāyate kiṃ svabhūmikair eva saṃprayujyate /  
utānyabhūmikair apīty ata āha /

yatrajas tanmayair (K.7 a)

iti / yatra jāto yatrajaḥ /  
tanmayair iti yatra dhātau bhūmau vā jātas taddhā (P. 24) tukaiḥ tadbhūmikair eva vā saṃprayujyate /  
nānyadhātukair anyabhūmikair vā //  
kiṃ punaś caturbhir eva kleśaiḥ saṃprayujyate / nēty āha /  
anyaiḥ sparsādyaś ca / (K.7)  
saṃprayujyata iti saṃbadhyate /  
caśabdaḥ samuccayārthaḥ /  
sparsādyair iti sparsāmanaskāavedanāsamjñāce tanābhiḥ /  
ete hi pañca dharmāḥ sarvatragatvāt sarvavijñānaiḥ saṃprayujyante /  
etair api yatra tātas tanmyair eva saṃprayujyate nānyadhātubhūmiaiḥ /  
atha vānyair iti mūlavijñānasamprayuktebhyo vyavacchedārtham /  
mūlavijñāne hy anivṛtāvyaḥkṛtāḥ sparsādayaḥ /  
kliṣṭe tu manasi manovannivṛtāvyaḥkṛtāḥ //  
yadi tatkliṣṭam manaḥ kuśalaksiṣṭāvyaḥkṛtāvasthyāsv aviśeṣeṇa pravartate na tasya tarhi nivṛttir asti /  
anivṛtte ca tasmin kuto mokṣa iti katham na mokṣābhāvaḥ prasajyate /  
na prasajyate yasmāt /

arhato na tat /

na nirodhasamāpattau mārga lokottare na ca // K.7 bcd //  
arhataś tāvadaśeṣakleśaprahāṇāt kliṣṭam mano nāivāsti /  
taddhi bhāvāgrikabhāvanāprahātavyakleśavad arhatvapṛāptyānantaryamārgaṇāiva prahīyate /  
tadanyakleśavad arhatvāvasthyāyām nāiva vidyate /  
ākimcanyāyatanavītarāgasyāpy anāgāmīno nirodhasamāpattilābhīno mārgabalena nirodhasamāpatter  
labhyatvān mārgavannirodhasamāpattiyavasthyāyām api nirudhyate /  
nirodhāc ca vyutthitasya punarālayavijñānād eva pravartate /  
mārga lokottare na cēti lokottaragrahaṇam laukikavyavacchedārtham /  
laukike tu mārga kliṣṭam manaḥ pravartata eva /  
nairātmyadarśanasyātmaradarśanapratipakṣatvān na lokottaramārga pravartum utsahate /  
vipakṣapratipakṣayor ayaugapadyāi lokottaramārga tannirudhyate /  
tasmādapi vyutthitasya punarālayavijñānād evōtpadyate //

dvitīyaḥ pariṇāmo 'yam K.8 a

uddiṣṭo nirdiṣṭaś cēti nigamayati //  
dvitīyapariṇāmānantaram trītiyapariṇāmo vaktavya ity ata āha /  
trītiyaḥ ṣaḍvidhasya yā /

viṣayasyoḥpalabdhiḥ sā

K.8 bc

(p. 25) ṭṛtīyo vijñānapariṇāma iti vākyaśeṣaḥ /

ṣaḍvidhasyēti ṣaṭprakārasya rūpaśabdagandharasaspraṣṭavyadharmātmakasya viṣayasya yā  
upalabdhir grahaṇaṁ pratipattir ity arthaḥ /

sā punaḥ kiṁ kuśalā akuśalā avyākṛtēty ata āha /

kuśalākuśalādvayā // K. 8 d //

kuśalā 'kuśalā 'dvayēty avyākṛtāpi /

alobhādveṣāmohaiḥ saṁprayuktā kuśalā /

lobhadveṣāmohaiḥ saṁprayuktā 'kuśalā /

kuśalākuśalair asaṁprayuktā advayā na kuśalā nākuśalēty arthaḥ /

sā punaḥ kīdrśaiś caitasikaiḥ saṁprayujyate /

kiyanto vā tatsaṁprayogiṇas caitasikā ity ata āha /

sarvatragair viniyataiḥ kuśalaiś caitasair asau /

saṁprayuktā tathā kleśair upakleśais trivedanā // 9 //

ya ete sarvatragādaya uddiṣṭās te na vijñāyanta ity atas tatpradarśanārtham āha /

ādyāḥ sparśādayaḥ

K.10 a

ādau nirdiṣṭatvād ādyāḥ sarvatragā ity arthaḥ / tathā hi /

sadā sparśamanaskāravitsaṁjñācetanānvitam / K.3 ab

iti prathamato nirdiṣṭāḥ /

sparśa eṣāṁ ādir iti sparśādayaḥ /

te punaḥ sparśamanaskārādayaḥ pañca dharmāḥ sarvaṁ cittam anugacchantīti sarvatragāḥ /

tathā hy ete ālayavijñāne kliṣṭe manasi pravṛttivijñāneṣu ca /

viśeṣeṇa pravartante //

viniyatān adhikṛtyāha /

chandādhimokṣasmr̥tayaḥ saha /

K.10 b

samādhidhibhyāṁ niyatāḥ

K.10 c

viśeṣe niyatatvād viniyatāḥ /

eṣāṁ hi viśeṣa eva viṣayo na sarvaḥ /

tatra chando 'bhiprete vastuny abhilāṣaḥ /

abhiprete vastuny abhilāṣa iti pratiniyataviṣayatvaṁ jñāpitam bhavaty anabhiprete chandāvhāvāt /

darśanaśravaṇādikriyāviṣayatvena yadabhimataṁ vastu tadabhipretaṁ /

tatra darśanaśravaṇādiprārthanā chandaḥ /

sa ca vīryārambhasaṁnīśrayadānakarmakaḥ /

adhimokṣo niścite vastuni tathāivādvadhāraṇaṁ /

niścitagrahaṇam aniścitaḥpratiṣedhārthaṁ /

yuktita āptōpadeśato vā yadvastu asaṁdigdhaṁ tanniścitam yenāivākāreṇa tanniścitam anityaduḥkhād

yākāreṇa tenāivākāreṇa tasya vastunaś cetasy adhiveśanam evam etannānyathēty avadhāraṇam

adhimokṣaḥ /  
 sa cāsarṁhāryatādānakarmakaḥ /  
 adhimukti-pradhāno hi svasiddhāntāt parapravātibhir apahartuṁ na śakyate /  
 smṛtiḥ sarṁstute (p. 26) vastuny asaṁpramoṣas cetaso ībhilapanatā /  
 sarṁstutaṁ vastu pūrvānubhūtaṁ /  
 ālambanagrahaṇāvipraṇāśakāraṇatvād asaṁpramoṣaḥ /  
 pūrvagr̥hītasya vastunaḥ punaḥ punarālambanākārasmaraṇam abhilapanatā /  
 abhilapanam evābhilapanatā /  
 sā punar avikṣepakarmikā /  
 ālambanābhilapane sati cittasyālambanāntare ākārāntare vā vikṣepābhāvād avikṣepakarmikā /  
 samādhir upaparīkṣye vastuni cittasyāikāgratā /  
 upaparīkṣyaṁ vastu guṇato doṣato vā /  
 ekāgratā ekālambanatā /  
 jñānasarṁnīśrayadānakarmakaḥ /  
 samāhite citte yathābhūtaparijñānāt /  
 dhīḥ praññā /  
 sāpy upaparīkṣya eva vastuni pravicyo yogāyogavīhito 'nyathā vēti /  
 pravicinotīti pravicyaḥ /  
 yaḥ samyaṁ mithyā vā sarṁkīrṇasvasāmānyalakṣaṇeṣv iva dharmeṣu vivekāvabodhaḥ /  
 yuktīyogaḥ /  
 sa punar āptōpadeśo 'numānaṁ pratyakṣaṁ ca /  
 tena triprakāreṇa yogena yo janitaḥ sa yogavīhitaḥ /  
 sa punaḥ śrutamayaś cintāmāyo bhāvanāmayaś ca /  
 tatrāptavacanaprāmāṇyādya 'vabodhaḥ sa śrutamayaḥ /  
 yuktinidhyānaśaś cintāmayaḥ / samādhījo bhāvanāmayaḥ /  
 ayogo 'nāptōpadeśo 'numānābhāso mithyāpraṇihitaś ca samādhis tenāgogena janito 'yogavīhitaḥ /  
 upapattiprātilambhiko laukikavyavahārāvabodhaś ca na yogavīhito nāyogavīhitaḥ /  
 eṣā ca sarṁśayavyāvartanakarmikā /  
 sarṁśayavyāvartanaṁ praññayā dharmān pravicinvato niścayalābhād iti /  
 ete hi pañca dharmāḥ parasparaṁ vyatiricyāpi pravartante /  
 evaṁ yatrādhimokṣas tatra nāvaśyam itarair api bhavitavyaṁ /  
 evaṁ sarvatra vācyam //  
 uktā viniyatāḥ /  
 tadanantarōddṣṭāsv idānīm kuśalā vaktavyā ity ata āha /  
 śraddhātha hrīr-apatrapā // K.10 d  
 alobhādītrayaṁ vīryaṁ praśrābdhīḥ sāpramādikā /  
 ahimsā kuśalāḥ K.11 abc

eta ekādaśa dharmā iti vākyāśeṣaḥ /  
 tatra śraddhā karmaphalasatyaratneṣv abhisampratyayaḥ prasādaś cetaso 'bhilāṣaḥ /  
 śraddhā hi tridhā pravartate /  
 sati vastuni guṇavaty aguṇavati vā sampratyayākārā /  
 sati guṇavati ca prasādākārā /  
 sati guṇavati ca prāptum utpādayitum vā śakye 'bhilāṣākārā /  
 cetasaḥ prasāda iti śraddhā hi cittakāluṣyavairodhikīty atas tatsamprayoge kleśōpakleśamalakāluṣyavigamāc  
 cittam śraddhām āgamya prasādatīti cetasaḥ prasāda ucyate /  
 sā punaś chandasamniśrayadānakarmikā /  
 hrīr ātmānam dharmam vādhipatiṁ kṛtvāvadyena lajjā /  
 sadbhir garhitatvād anīṣṭavipākavāc ca pāpam evāvadyam /  
 tenā(p. 27)vadyena kṛtenākṛtena vā yā cittasyāvalīnatā lajjā sā hrīḥ /  
 iyam ca duścaritasamnyamasamniśrayadānakarmikā /  
 apatrāpyam lokam adhipatiṁ kṛtvāvadyena lajjā /  
 loke hy etadgarhitam mām cāivamkarmānam viditvā garhiṣyatīty aślokādibhayādyena lajjate /  
 idam api duścaritasamnyamanasamniśrayadānakarmakam /  
 alobho lobhapatipakṣaḥ /  
 lobho nāma bhava bhavōpakaraṇeṣu ca yāsaktiḥ prārthanā ca /  
 tatpratipakṣo 'lobho bhava bhavōpakaraṇeṣu cānāsaktiḥ vaimukhyam ca /  
 ayam ca duścaritāpravṛttisamniśrayadānakarmakaḥ /  
 adveṣo dveṣapatipakṣo maitrī /  
 dveṣo hi satveṣu duḥkhe duḥkhashthānīyeṣu ca dharmeṣv āghātaḥ /  
 ayam api duścaritāpravṛttisamniśrayadānakarmakaḥ /  
 amoho mohapatipakṣaḥ /  
 ayathābhūtasampratipattir mohaḥ /  
 karmaphalasatyaratneṣv ajñānam /  
 mohapatipakṣatvād amohas teṣv eva karmaphalasatyaratneṣu sampratipattih /  
 ayam api duścaritāpravṛttisamniśrayadānakarmakaḥ /  
 vīryam kauśīdyapatipakṣaḥ /  
 kuśale cetaso 'bhyutsāhaḥ / na tu kliṣṭe /  
 kliṣṭe t tūtsāhaḥ kutsitatvāt kauśīdyam eva /  
 etacca kuśalapakṣaparipūraṇapariniṣpattikarmakam /  
 praśrabdhir dauṣṭhlyapatipakṣaḥ kāyacittakarmanyatā /  
 dauṣṭhlyyam kāyacittayor akarmanyatā sāmkleśikadharmabījāni ca /  
 tadapagame praśrabdhisadbhāvāt /  
 tatra kāyakarmanyatā kāyasya svakārtheṣu laghusamutthānatā yato bhavati /  
 cittakarmanyatā samyammanasikārasamprayuktasyāhlādalāghavanimittam yaccaitasikam

dharmântaram tadyogāc cittam ālambane pravartate 'tas taccittakarmanyatēty ucyate /  
 kāyasya punaḥ spraṣṭavyaviśeṣa eva prītyāhṛtaḥ kāyaprasārabdhir veditavyā /  
 prītamanasaḥ kāyaḥ prasāramyata iti sūtre vacanāt /  
 iyaṁ tadvaśenāśrayaparāvṛtīto 'śeṣakleśāvaraṇaṇiṣkarṣaṇakarmikā /  
 sāpramādikā sahāpramādena vartata iti sāpramādikā /  
 kā punar asau / upekṣā / kuta etat /  
 ekāntakuśalatvāt sarvakuśalānām cēha nirdeśādḥikārāc chraddhādivat sākṣādnirdeśāt  
 tadvyatiriktānyakuśalābhāvāc ca upekṣāiva vijñāyate /  
 tatrāpramādaḥ pramādapratipakṣaḥ /  
 alobhād yāvad vīryam apramādaḥ /  
 yair alobhādīn nīśrītyākuśalān dharmān prajahāti tatpratipakṣāc ca kuśalān dharmān bhāvayati te  
 'lobhādayo 'pramādaḥ /  
 ata eva pramādapratipakṣaḥ pramādasyāto viparītatvāt /  
 sa punar laukikalokottarasāmpattiparipūraṇakarmakaḥ /  
 upekṣā cittasamatā cittaprasāṭhatā cittānābhogātā /  
 ebhis tribhiḥ padair upeṣyā ādimadhyāvasānāvasthā dyotitā /  
 tatra laya auddhatyaṁ vā cetaso (p. 28) vaiśamyāṁ /  
 tasyābhāvād ādau cittasamatā /  
 tato 'nabhisaṁskāreṇāprayatnena samāhitacetaso yathābhīyogaṁ samasyāiva yā pravṛtīḥ sā  
 cittaprasāṭhatā /  
 sā punar avasthā layāuddhatyaśāṅkānūgatācīrabhāvitvāt /  
 tato bhāvanāprakarsagamanāt tadvipakṣadūrībhāvāt taccharīkābhāve layāuddhatyapratipakṣanimitteṣv  
 ābhogam akurvato 'nābhogāvasthā cittasyānābhogātā /  
 iyaṁ ca sarvakleśōpakleśānavakāśasāmnīśrayadānakarmikā /  
 avihīmsā vihiṁsāpratipakṣaḥ /  
 vadhabandhanādībhiḥ sattvānām avihēṭhanam avihīmsā sattveṣu karuṇā /  
 kaṁ ruṇaddhīti karuṇā / kaṁ iti sukhasyākhyaḥ sukhaṁ ruṇaddhīty arthaḥ /  
 kāruṇiko hi paraduḥkhaduḥkhī bhavātīti /  
 iyaṁ cāvihēṭhanakarmikā //  
 uktā ekādaśa kuśalās tadanantarōddiṣṭās tu kleśā ity atas tān adhikṛtyāha /  
 kleśā rāgapratighamūḍhayaḥ // 11 //  
 mānadṛgvicikitsās ca K.12 a  
 iti, rāgaśca pratighaśca mūḍhīśca rāgapratighamūḍhayaḥ /  
 tatra rāgo bhavabhogayor adhyavasānaṁ prārthanā ca /  
 sa punar duḥkhasāṁjananākarmakaḥ / (yojana -> janana)  
 duḥkham atrōpādānaskandhās teṣāṁ kāmarūpārūpyatṛṇāvaśād abhinirvṛtteḥ /  
 ato rāgasya duḥkhasāṁyojanāṁ karma nirdīśyate / (yojanāṁ -> jananaṁ)

pratighah sattvesv āghātah sattvesu rūksacittatā yenāvistah sattvānām vadhabandhanādikam  
 anartham cintayati /  
 sa punar asparśavihāraduścaritasamniśrayadānakarmakah /  
 sparśaḥ sukhaṁ tena sahito vihāraḥ sparśavihāraḥ na sparśavihāro 'sparśavihāraḥ duḥkhasahita ity  
 arthaḥ /  
 āghātacittasyāvaśyaṁ daurmanasyasamudācārāc cittam tapyate /  
 cittānavidhānāc ca kāyo 'pi tapyata evēti sarvēryāpatheṣu saduḥkhasavighāto 'sparśavihāro bhavati /  
 pratihatacittasya ca na kiñciduścaritaṁ vidūra iti pratigho 'sparśavihāraduścartiasamniśrayadānak  
 armaka uktaḥ /  
 moho 'pāyeṣu sugatau nirvāṇe tatpratiṣṭhāpakeṣu hetuṣu teṣāṁ cāvīparīte hetuphalasāmbandhe  
 yad ajñānaṁ /  
 ayaṁ ca saṁkleśōtpattisamniśrayadānakarmakah /  
 tatra kleśakarmajanmātmakas trividhaḥ saṁkleśaḥ /  
 tasyōtpattiḥ pūrvapūrvasaṁkleśanimitta uttarottarasya saṁkleśasyātmalābhah /  
 utpatteḥ samniśrayadānakarmakam iti /  
 mūḍhasyāiva hi mithyājñānasamśayarāgādikleśapaunarbhavikakarmajanmanāṁ pravṛttir  
 nāmūḍhasyēti /  
 mānaḥ / māno hi nāma sarva eva satkāyadrṣṭisamāśrayeṇa pravartate /  
 sa punaś cittasyōnnatilakṣaṇaḥ /  
 tathā hy ātmātmīyabhāvaṁ skandheṣv adhyāropyāyam aham idaṁ mamēty ātmānaṁ tena tena  
 viśeṣeṇōnnamayati anye(p. 29)bhyo 'dhikam manyate /  
 sa cāguravaduḥkhōtpattisamniśrayadānakarmakah /  
 agauravaṁ guruṣu ca pudgaleṣu stabdhatā kāyavācor apraśritatā duḥkhōtpattiḥ punar atra  
 punarbhavōtpattiḥ /  
 sa ca punaś cittōnnatisvarūpābhede 'pi cittōnnatinimittabhedāt saptadhā bhidyate /  
 māno 'timāna ity evam ādi /  
 hīnāt kulavijñānavittādibhiḥ śreyān asmi kulavijñānavittādibhir iti yā cittasyaunnatiḥ sadṛśena vā  
 kulādibhir eva sadṛśo 'smīti yā cittasyōnnatiḥ sa mānaḥ /  
 atimānaḥ /  
 kulavijñānavittādibhiḥ sadṛśāt tyāgaśīlapauruṣādibhiḥ śreyān asmi śreyasā vā kulavidyādibhiḥ  
 sadṛśo 'smi vijñānavittādibhir ity ayam atimānaḥ /  
 śreyasaḥ kulavijñānavittair aham eva śreyān kulavijñānavittair iti yā cittasyaunnatir ayam  
 mānātimānaḥ / asmimānaḥ /  
 pañcasūpādānaskandheṣv ātmātmīyarahiteṣv ātmātmīyābhīniveśādya cittasyōnnatiḥ so 'smimānaḥ /  
 abhimānaḥ / aprāpta uttare viśeṣādhighame prāpto mayēti yā cittasyōnnatiḥ so 'bhimānaḥ /  
 ūnamānaḥ / bahūntaraviśiṣṭāt kulavidyādibhir alpāntarahīno 'smi kulavidyādibhir iti yā cittasyōnnatir  
 iyam ūnamānaḥ /



mithyāmānaḥ / aguṇavato guṇavān asmīti yā cittasyōnnatiḥ sa mithyāmānaḥ /  
 aguṇā hi dauḥśīlyādayas te yasya vidyante so 'guṇavān /  
 tasmād guṇavān asmīty anena hi dānaśīlādyabhāve 'pi guṇavattvam abhyupagataṁ bhavātīty ato  
 nirvastukatvān mithyāmāna ity ucyate /  
 dr̥g iti sāmānyanirdeśe 'pi kleśādihikārāt pañcāiva kleśātmikāḥ satkāyadr̥ṣṭyādikā dr̥ṣṭayaḥ  
 sambadhyante /  
 na laukikī samyagdr̥ṣṭir anāsravā /  
 āsām tu kliṣṭanitīraṇākāratvād aviśeṣe 'py ālambanākārabhedāt parasparato bhedaḥ /  
 tatra satkāyadr̥ṣṭir yat pañcasūpādānaskandheṣv ātmātmīyadarśanam /  
 antagrāhadr̥ṣṭis teṣv eva pañcasūpādānaskandheṣv ātmātmīyatvena gr̥hīteṣu yad ucchedataḥ  
 śāśvatato vā darśanam / mithyādr̥ṣṭiḥ /  
 yayā mithyādr̥ṣṭyā hetuṁ vāpavadati phalaṁ kriyāṁ vā sadvā vastu nāśayati sā sarvadarśanapāpatvān  
 mithyādr̥ṣṭir ity ucyate /  
 dr̥ṣṭiparāmarśaḥ pañcasūpādānaskandheṣv agrato viśiṣṭataḥ śreṣṭhataḥ paramataś ca yad darśanam /  
 śīlavrataparāmarśaḥ / pañcasūpādānaskandheṣu śuddhito muktito nairyāṅikataś ca yad darśanam /  
 vicikitsā karmaphalasatyaratneṣ vimatiḥ / vividhā matir vimatiḥ /  
 syān na syād iti / prajñātaś cēyam jātyantaram evōktā //  
 uktāḥ ṣaṭkleśās tadanantarōddiṣṭās tv idānim upakleśā vaktavyā ity ata āha /  
 krodhōpanahane punaḥ /  
 mrakṣaḥ pradāśa īrṣyātha mātsaryam saha māyayā // K, 12 bcd  
 śāṭhyam mado 'vihimsā-hrīr atrapā styānam uddhavaḥ /  
 āsraddhyam atha kausīdyaṁ pramādo muṣitā smṛtiḥ // K. 13  
 (p. 30) vikṣepo 'samprajanyaṁ ca kaukr̥tyaṁ middham eva ca /  
 vitarkaś ca vicāraś cēty upakleśā dvaye dvidhā // K. 14  
 tatra krodho vartamānam apakāram āgamya yaś cetasa āghātaḥ /  
 ayam cāghātasvarūpatvāt pratighān na bhidyate /  
 kiṁ tv asya pratighasyāvasthāviśeṣe prajñaptatvāt pratighāmśikaḥ /  
 vartamānam apakāram āgamya yaś cetasa āghātaḥ satvāsatvaviṣayo daṇḍadānādīsamnīśrayadānak  
 armakaś ca sa krodha iti prajñapyate /  
 upanāho vairānubandhaḥ / krodhād ūrdhvaṁ mamānenēdam apakṛtam ity asya  
 vairātmakasyānuśayasyānutsargaḥ prabandhena pravartanam upanāhaḥ /  
 ayam cākṣāntīsamnīśrayadānakarmakaḥ /  
 akṣāntir apakārāmarśaṇaṁ pratyapakāracikīrṣā ca /  
 ayam api krodhavat pradveṣāvasthāviśeṣe prajñapyate /  
 ataḥ prajñaptisann eva veditavyaḥ /  
 mrakṣa ātmano 'vadyapracchādanā /  
 chandadveṣabhayādīn nirākṛtya kāle taddhitāiṣiṇā codakena tat tvam evamkārīty anuyuktasya

mohâmśikyavadyapracchādanā mraṅśaḥ /  
 mohâmśikatvaṃ tu mraṅśasya pracchādanākāratvāt /  
 ayaṃ ca kauṛṭyâsparśa(vihāra)samñisrayadānakarmakaḥ /  
 dharmatâiṣā yad avadyaṃ pracchādayataḥ kauṛṭyam utpadyate kauṛṭyāc cāvaśyaṃ daurmanasyena  
 samṇprayogād asparśavihāra iti/  
 pradāśās caṇḍavacodāśitā / caṇḍaṃ vacaḥ pragāḍhaṃ pārūṣyaṃ /  
 marmaghaṭṭanayogena daśanaśilo dāśī tadbhāvo dāśitā /  
 ayaṃ ca bhāvapratyayaḥ svārthikaḥ /  
 caṇḍena vacasā pradaśatīti caṇḍavacodāśitā /  
 ayaṃ ca krodhôpanāhapūrvakaś cetasa āghātasvabhāva iti pratighâmśika eva na dravyato bhidyate /  
 ayaṃ ca vāgduścaritaprasavakarmakaḥ asparśavihārakarmakaś ca /  
 tadvataḥ pudgalasya duḥkhasavāsatvāt /  
 īrṣyā parasampattau cetaso vyāroṣo lābhasatkārādhyavasitasya lābhasatkārakulaśīlāśrutādīn  
 guṇaviśeṣān parasyôpalabhya dveṣâmśiko 'marṣakṛtaś cetaso vyāroṣa īrṣyā /  
 svam āśrayaṃ vyāpya roṣo vyāroṣaḥ /  
 daurmanasyasamṇprayogāt tatpūrvakaś cāsparśavihāra iti daurmanasyâsparśavihārakarmikôcyate /  
 mātsaryaṃ dānavirodhī cetasa āgrahaḥ /  
 upāttaṃ vastu dharmâmiśakauśalâtmaṃ yena pūjānugrahakāmyayārthine 'narthine vā dīyate tad  
 dānaṃ /  
 tasmin sati dānâbhāvāt tadvirodhīty ucyate /  
 lābhasatkārādhyavasitasya jīvitôpakaraṇesu rāgâmśikaś cetasa āgraho 'parityāgēcchā mātsaryam /  
 idaṃ cāsamlekhasa(m)niśrayadānakarmakaṃ /  
 asaṃlekhaḥ punar mātsaryeṇānupayujyamānānām apy upakaraṇā(m) samcayād veditavyaḥ /  
 māyā paravañcanā yābhūtārthasamdarśanātā /  
 lābhasatkārādhyavasitasya paravañcanābhīprāyeṇānyathāvasthitasya śīlāder arthasyānyathā  
 prakāśanā /  
 iyaṃ ca sahitābhyām (p. 31) rāgamohābhyām abhūtān guṇān prakāśayatas tayoḥ samuditayoḥ  
 prajñāpyata iti krodhādivat prajñāptita eva na dravyata iti mithyājīvasamñisrayadānakarmikā /  
 śāṭhyaṃ svadoṣapracchādanôpāyasamgrhītaṃ cetasaḥ kauṭilyaṃ /  
 svadoṣapracchādanôpāyaḥ paravyāmohanāṃ /  
 tatpunar anyeṇānyat pratisaran vikṣipati aparispḥuṭaṃ ca pratipadyate /  
 ata eva śāṭhyaṃ mraṅśād bhidyate /  
 sa hi spḥuṭam eva pracchādayati na kākvā /  
 idaṃ api lābhasatkārādhyavasitôpāyābhyām rāgamohābhyām svadoṣapracchādanārthaṃ  
 paravyāmohanāya pravartate /  
 tayoḥ eva sahitayoḥ prajñāpyate / idaṃ ca samyagavavādālābhaparipanthikarmakaṃ /  
 samyagavavādasya yo lābho yoniṣomanasikāras tasyāntarāyaṃ karoti /

madaḥ svasaṃpattau raktasyôddharṣaś cetasaḥ paryādānaṃ /  
 kulârogyayauvanabalarūpâisvaryaḥ buddhamedhâpradarṣaḥ svasaṃpattih /  
 uddharṣo harṣaviśeṣaḥ /  
 yena harṣaviśeṣeṇa cittam asvatantrī-kriyate tena tadātmatantrīkaraṇāt paryāttam bhavātīty etad  
 uktaṃ cetasaḥ paryādānam iti /  
 ayaṃ ca sarvakleśôpakleśasaṃnīśrayadānakarmakaḥ /  
 vihiṃsā satvaviheṭhanā /  
 vividhair vadhabandhanatāḍanatarjanâdibhiḥ satvānām hiṃsā vihiṃsā /  
 viheṭhyante 'nayā satvā vadhabandhanâdibhir duḥkhadaurmanasyôtpādanād iti sarvasatvaviheṭhanā /  
 sā punaḥ pratighāṃsiki nighrṇatā satveṣu cittarūkṣatā satvaviheṭhanakarmikā vihiṃsēty ucyate /  
 āhrīkyam svayam avadyenâlajjā /  
 tasmin karmaṇyâtmanam ayogyam manyamānasyâpi yāvadyenâlajjā sāhrīkyam hrīvipakṣabhūtam /  
 anapatrāpyam parato 'vadyenâlajjā /  
 lokaśāstraviruddham etan mayā kriyata ity evam avagacchato 'pi yā tayā pāpakriyayâlajjā  
 sāpatrāpyavipakṣabhūtam anapatrāpyam /  
 etacca dvayamapi sarvakleśôpakleśasāhāyyadānakarmakaṃ /  
 rāgadveṣamohaprakāreṣu sarvâsatkāryaprabhavaḥetuṣu rāgadveṣayor ayaugapadyād yathāsambhavam  
 prajñāpyate na tu svatantram asti /  
 styānam cittasyâkarmaṇyatā staimityam /  
 stimitasya bhāvaḥ staimityam tadyogāc cittam jaḍībhavati stimitam bhavati nālambanam  
 pratipattum samutsahate /  
 etacca sarvakleśopakleśasāhāyyadānakarmakaṃ /  
 mohāśmīse prajñāptatvācca mohāśmīkam eva na pṛthag vidyate /  
 auddhatyam cittasyāvvyupāśamaḥ /  
 vyupāśamo hi śamathas tadviruddho 'vyupāśamaḥ /  
 sa punar eṣa rāgânukūlapūrvahasitaramitakrāḍītādyanusmarataś cetaso 'vyupāśamahetuḥ  
 śamathaparipanthikarmakaḥ /  
 āśraddhyam karmaphalasatyaratneṣv anabhisampratyayaḥ śraddhāvīpakṣaḥ /  
 śraddhā hy astitvaguṇavatvaśakyatveṣv abhisampratyayaḥ prasādo 'bhilāṣaś ca yathākramam /  
 aśraddhā tadviparyeṇāstitvaguṇavatvaśakyatveṣv anabhisampratyayo 'prasādo 'nabhilāṣaś ca /  
 kausīdyasaṃnīśrayadānakarmakam /  
 aśraddadhānasya prayogacchandābhāvāt kausīdyasaṃnīśrayadānakarmakatvam /  
 kausīdyam kuśale cetaso (p. 32) 'nabhyutsāho vīryavīpakṣaḥ /  
 kuśale kāyavānmanaḥkarmani nidrāpārśvaśayanasukham āgamyā yo mohāśmīkaś cetaso  
 'nabhytsāhaḥ /  
 etacca kuśalapakṣaprayogaparipanthikarmakaṃ /  
 pramādo yair lobhadveṣamohakausīdyaiḥ kleśād rāgadveṣamohādīkāc cittam na rakṣati kuśalam ca

tatpratipakṣabhūtaṁ na bhāvayati /  
 teṣu lobhadveṣamohakausīdyeṣu pramādaḥ prajñāpyate /  
 ayaṁ cākuśalavṛddhikuśalaparihāṇisaṁnīśrayadānakarmakaḥ /  
 muṣitā smṛtiḥ kliṣṭā smṛtiḥ / kliṣṭēti kleśasaṁprayuktā /  
 iyaṁ ca vikṣepasaṁnīśrayadānakarmikā / vikṣepo rāgadveṣamohāṁśikaś cetaso visāraḥ /  
 vividhaṁ kṣipyate 'nena cittam iti vikṣepaḥ /  
 yai rāgadveṣamohaiś cittam samādhyālabhanād bahiḥ kṣipyate teṣu yathāsaṁbhavaṁ vikṣepaḥ  
 prajñāpyate /  
 eṣa ca vairāgyaparipanthikarmakaḥ /  
 asaṁprajanyaṁ kleśasaṁprayuktā prajñā /  
 yayāsaṁviditā kāyavākcittacaryā atikramaprakramādiṣu vartate karaṇīyākaraṇīyaaajñānāt /  
 etaccâpattisaṁnīśrayadānakarmakam /  
 kaukṛtyaṁ cetaso vipratīśāraḥ / kutsitaṁ kṛtam iti kukṛtaṁ /  
 tadbhāvaḥ kaukṛtyaṁ /  
 iha tu kukṛtaviṣayaś cetaso vilekhaḥ kaukṛtyaṁ caitasikādhikārāt /  
 etacca cittasthitiparipanthikarmakaṁ /  
 middham asvatantṛtticetaso 'bhisamkṣepaḥ / vṛttir ālambane pravṛtṭiḥ /  
 sâsvatantrā cetaso yato bhavati tanmiddham /  
 kāyacittasaṁdhāraṇāsamarthā vā vṛtṭiś cetaso 'svatantratā sā yato bhavati tanmiddham /  
 abhisamkṣepaś cetasaś cakṣurādīndriyadvāreṇâpravṛtṭiḥ /  
 etacca mohāṁśe prajñāpanān mohāṁśikaṁ kṛtyâtipattisaṁnīśrayadānakarmakaṁ ca /  
 vitarkaḥ paryeṣako manojalpaḥ prajñācetanāviśeṣaḥ /  
 paryeṣakaḥ kim etad iti nirūpaṇâkârapravṛttaḥ /  
 manaso jalpo manojalpaḥ / jalpa iva jalpaḥ / jalpo 'rthakathanam /  
 cetanāprajñāviśeṣa iti cetanāyās cittaparispandâtmakatvât prajñāyās ca guṇadoṣavivekâkâratvât  
 tadvaśena cittapravṛtteḥ /  
 kadācic cittacetanayor vitarkaprajñaptiḥ kadācit prajñācetasor yathākramam anabhyūhâbhyūhâvasthanayoḥ /  
 atha vā cetanāprajñayor eva vitarkaprajñaptis tadvaśena cittasya tathāpravṛttatvât / sa eva  
 cittasyâudārikatā /  
 audārikatēti sthūlatā vastumātraparyeṣaṇâkâratvât /  
 eṣa ca nayo vicāre 'pi draṣṭavyaḥ /  
 vicāro 'pi hi cetanāprajñāviśeṣâtmakaḥ /  
 pratyavekṣako manojalpa eva / idaṁ tad iti pūrvâdhigatanirūpaṇât /  
 ata eva ca cittasūkṣmatēty ucyate /  
 etau ca sparśâsparśavihārasaṁnīśrayadānakarmakau /  
 anayoś câudārikasūkṣmatayā vyavasthāpanât pṛthakkaraṇam /  
 dvaye dvidhēti / dvayaṁ ca dvayaṁ ca dvaye /

te punaḥ kaukṛtyamiddhe vitarkavicārau ca /  
 ete ca catvāro dharmā dvidhā kliṣṭā akliṣṭās ca /  
 tatrākuśalam akṛtvā kuśalam ca kṛtvā yaś cetaso vilekhas tatsamkliṣṭam kaukṛtyam /  
 yat kuśalam akṛtvā tatkaukṛtyam akliṣṭam /  
 middhamapi kliṣṭacittāviddham kliṣṭacittasamprayuktaṁ (p. 33) ca kliṣṭam /  
 akliṣṭacittāviddham akliṣṭacittasamprayuktaṁ cākliṣṭam /  
 kāmavyāpādavihimsādivitarkāḥ kliṣṭāḥ /  
 naiṣkramyādivitarkā akliṣṭāḥ /  
 evaṁ paropaghātōpāyavicāraḥ kliṣṭāḥ /  
 parānugrahōpāyavicāro 'kliṣṭāḥ /  
 tatra ye kaukṛtyamiddhavitarkavicārāḥ kliṣṭāḥ ta evōpakleśā nētare /  
 tatra yathā rūpaśabdādīyupalabdhiḥ ṣaṭprakārā yathāsambhavaṁ sarvaiś caitasikāḥ samprayujyate  
 sarvatragair viniyataiḥ kuśalaiḥ kleśair upakleśaiś ca /  
 evaṁ trivedanā, tīrṣbhīś ca vedanābhiḥ samprayujyate sukhayā duḥkḥayā aduḥkḥāsukḥayā ca /  
 saumanasyadaurmanasyōpekṣāsthānīyeṣu rūpādīṣu tadutpatteḥ kuśalā akuśalā avyākṛtā ca /  
 ālayavijñānaṁ tu sarvatragaiḥ pañcabhir eva samprayujyate nānyais,  
 tatra cōpekṣāiva vedanā anivṛtāvākṛtaṁ ca /  
 kliṣṭam manaḥ sarvatragaiḥ pañcabhiś caturbhiś ca kleśair ātmamohādibhiḥ /  
 tatrōpekṣaiva vedanā nivṛtāvākṛtaṁ cēti //  
 idam idānīm cintyate /  
 kiṁ pañcānām cakṣurvijñānādīnām yugapadāmbanapratyayasāmīdhye 'py ālayavijñānād  
 ekasyāivōtpattir bhavati na dvayor na bahūnām vā /  
 yathāike manyante /  
 na dvayor na bahūnām vā yugapatsamanantarapratyayābhāvād ekasyāiva vijñānasyautpattir  
 bhavati /  
 na cāikaṁ vijñānaṁ bahūnām samanantarapratyayatvaṁ pratipattum utsahate /  
 utāniyamena / yady ekasyāiva pratyayasāmīdhyaṁ ekam evōtpadyate /  
 evaṁ dvayor bahūnām vā pratyayasāmīdhye utpattir bhavaṭīty ata āha /  
 pañcānām mūlavijñāne yathāpratyayam udbhavaḥ /  
 vijñānānām saha na vā taraṅgāṇām yathā jale // K.15 //  
 pañcānām iti cakṣurādivijñānānām tadanucaramanovijñānasahitānām /  
 pañcānām cakṣurādivijñānām bijāśrayatvāt tata utpatter gatiṣu janmōpādānāc cālayavijñānaṁ  
 mūlavijñānam ity ucyate /  
 yathāpratyayam udbhava ity / yasya yasya yaḥ pratyayaḥ samnihitas tasya tasya niyamenōdbhava  
 ātmalābhāḥ /  
 saha na vēti yugapatkrameṇa vā /  
 taraṅgāṇām yathā jala ity / ālayavijñānāt pravṛttivijñānānām yugapadayugapac cōtpattau drṣṭāntaḥ /

yathôktam / tad yathā viśālamate /

mahata udakâughasya vahataḥ saced ekasya taraṅgasyôtpattipratyayaḥ pratyupasthito bhavaty  
ekam eva taraṅgam pravartate /

saced dvayos trayāṅām saṁbahulānām taraṅgānām utpattipratyayaḥ pratyupasthito bhavati (/)  
yāvatsaṁbahulāni taraṅgāni pravartante (/) na ca tasyôdakâughasya srotasā vahataḥ samucchittir  
bhavati /

na paryupayogaḥ prajñāyate /

evam eva viśālamate /

tadôghasthānīyam ālayavijñānam saṁnīśritya pratiṣṭhāya saced ekasya (cakṣur) –  
vijñānasyôtpattipratyayaḥ pratyupasthito bhavati (/) ekameva cakṣurvijñānam pravartate /

saced dvayos trayāṅām sacet pañcānām (p. 34) vijñānānām utpattipratyayaḥ pratyupasthito bhavati /  
sakṛd yāvatpañcānām pravṛttir bhavati /

atra gāthā /

ādānavijñānagabhīrasūkṣmo ogho yathā vartati sarvabījo /

bālāna eṣo mayi na prakāśite mā haiva ātmā parikalpayeyuḥ //

(bālā eṣām api) (śīte mohāiva)

iti /

na hi vijñānapratiniyamenā lambanapratyayavat samanantarapratyaya iṣyate /

sarvavijñānôtpattau sarvasya vijñānasya tatsamanantarapratyayatvābhyupagamāt /

ata ekasmādapi samanantarapratyayād ālambanapratyayasāmnidhye dvayor bahūnām vā  
vijñānānām utpattir na virudhyate /

kiṁ cātra kāraṇam /

yat samanantarapratyayapratiniyamābhāve pañcānām ca yugapadā lambanapratyayasāmnidhye  
ekenāivôtpattavyam na pañcabhir apīti /

tasmād ālambanasadbhāve pañcānām apy utpattir ity abhyupeyam //

idam idānīm vaktavyam /

kiṁ manovijñānam cakṣurādivijñānaiḥ saha pravartate vinā vā /

uta nāivēty ata āha /

manovijñānasambhūtiḥ sarvadāsamjñikād ṛte /

samāpattidvayān middhān mūrchanād apy acittakāt // K.16 //

iti /

sarvadēti sarvakālam cakṣurādivijñānaiḥ saha vinā vēty arthaḥ /

asyôtsargasyāpavādam ārabhate /

asamjñikād ṛte / samāpattidvayān middhān mūrchanād apy acittakād iti /

tatrāsamjñikam asamjñīsatveṣu deveṣūpapannasya yaś cittacaitasikānām dharmāṅām nirodhaḥ /

samāpattidvayam asamjñīsamāpattir nirodhasamāpattīś ca /

tatrāsamjñīsamāpattis tṛtīyadhyanād vītarāgasya-ūrdhvam avītarāgasya niḥsaraṇasamjñīpūrvakeṇa



manasikāreṇa manovijñānasya tatsamprayuktānam ca caittānām yo nirodhaḥ so 'trāsamjñīsamāpattir  
 ity ucyate /  
 nirudhyate 'nenēti nirodhaḥ /  
 sa punaḥ sasamprayogasya manovijñānasya samudācāranirodhaḥ /  
 āśrayasyāvasthāviśeṣaḥ /  
 sa ca samāpatticittād anantaram cittāntarōtpattiviruddha āśrayaḥ prāpyata iti samāpattir ity ucyate /  
 nirodhasamāpattir ākīrcanyāyatanavītarāgasya śāntavihārasamjñāpūrvakeṇa manasikāreṇa  
 sasamprayogasya manovijñānasya kliṣṭasya ca manaso yo nirodhaḥ / iyam apy asamjñīsamāpattivad  
 āśrayasyāvasthāviśeṣe prajñapyate /  
 acittakaṁ middhaṁ gāḍhamiddhōpahatatvād āśrayasya tāvatkālaṁ manovijñānāpravṛtter acittakam  
 ity ucyate /  
 acittikā mūrcchā, āgantunābhigātena vātapittaśleṣma-vaiṣamyena vā yad āśrayavaiṣamyam  
 manovijñānapravṛttiviruddhaṁ /  
 tatrācittikā mūrcchōpa(p. 35)caryate /  
 etāḥ pañcāvasthā varjayitvā tadanyāsu sarvāv avasthāsu manovijñānapravṛttir veditavyā /  
 evam āsamjñīkādīṣu manovijñāne niruddhe tadapagame punaḥ kuta utpadyate / yat tasya kālakriyā  
 na bhavati /  
 tat punar ālayavijñānād evōtpadyate /  
 tad dhi sarvavijñānabījakam iti //  
 yatra vijñānapariṇāme ātmadharmōpacāraḥ /  
 sa punas tridhēty uddīśya vistareṇa trividho 'pi nirdiṣṭaḥ /  
 idānīm ātmadharmopacāro yaḥ prajñapyate sa vijñānapariṇāma eva na vijñānapariṇāmāt  
 pṛthagasty ātmā dharmā vēti yat pratijñātam tatprasādhanārtham āha /  
 vijñānapariṇāmo 'yam vikalpo yad vikalpyate /  
 tena tannāsti tenēdam sarvaṁ vijñaptimātrakam // K.17 //  
 iti / yo 'yam vijñānapariṇāmas trividho 'nantaram abhihitaḥ so 'yam vikalpaḥ /  
 adhyāropitārthākārāḥ traidhātukās cittacaittā vikalpa ucyate /  
 yathoktaṁ /  
 abhūtaparikalpas tu cittacaittās tridhātukāḥ / (MVbh.I.8ab) iti /  
 tena trividhena vikalpenālayavijñānakliṣṭamanahpravṛttivijñānasvabhāvena sasamprayogeṇa yad  
 vikalpyate bhājanam ātmā skandhadhātāvāyatanarūpaśabdādikaṁ vastu tan nāstīty atah sa  
 vijñānapariṇāmo vikalpa ucyate /  
 asadāmbanavāt /  
 katham punar etadvijñāyate tadāmbanam asad iti /  
 yad dhi yasya kāraṇam tasmīn samaye cāvīruddhe ca tadutpadyate nānyataḥ /  
 vijñānam ca māyāgandharvanagarasvapnatimirādāv asaty apy ālambane jāyate /  
 yadi ca vijñānasyāmbanapratibaddha utpādaḥ syāt evam sati māyādīṣv arthābhāvān na vijñānam

utpadyeta /  
 tasmāt pūrvakān niruddhāt tajjātīyavijñānād vijñānam utpadyate /  
 na bhāyād arthāt tasminn asaty api bhāvāt / (udbhāvāt?)  
 dṛṣṭā cābhinne 'py arthe pratipattrīṇām parasparaviruddhā pratipattiḥ /  
 na cāikasya parasparaviruddhānekātmakatvaṁ yujyate /  
 tasmāt adhyāropitarūpatvād vikalpasyāḷambanam asad iti pratipattavyaṁ /  
 anena tāvat samāropāntarān parihr̥tyāpavādāntaparijihīṛṣayā āha /  
 tenēdaṁ sarvaṁ vijñaptimātrakaṁ (K.17cd) iti /  
 tenēti tasmāt /  
 yasmāt pariṇāmātmakena vikalpena yad vikalpyate, tena tannāsti, tasmād viṣayābhāvāt, sarvaṁ  
 vijñaptimātrakaṁ /  
 (p. 36) sarvaṁ iti traidhātukaṁ asaṁskṛtaṁ ca /  
 mātraśabdāda tadadhikaviṣayavyavacchedārthaḥ /  
 kakāraḥ pādapūraṇārthaḥ //  
 yadi sarvaṁ vijñaptimātrakaṁ eva na tato 'nyaḥ kartā karaṇaṁ cāsti /  
 kathaṁ mūlavijñānād anadhṣṭhitād asati karaṇe vikalpāḥ pravartanta ity āha /  
 sarvabījaṁ hi vijñānaṁ pariṇāmas tathā tathā /  
 yāty anyonyavaśād yena vikalpaḥ sa sa jāyate // K.18 //  
 tatra sarvadharmotpādanaśakyānugamāt sarvabījaṁ /  
 vijñānam ity ālayavijñānaṁ /  
 vijñānaṁ hy asarvabījaṁ apy astīty atah sarvabījaṁ ity āha /  
 vijñānād anyad api kaiścīt pradhānādi sarvabījaṁ kalpyata iti vijñānam ity āha /  
 atha vā, ekapadavyabhicāre 'pi viśeṣaṇaviśeṣyatvadarśanān nāyaṁ doṣaḥ /  
 pariṇāmas tathā tathā yāty anyonyavaśād iti, pūrvāvasthāto 'nyathābhāvaḥ pariṇāmaḥ /  
 tathā tathēti tasya tasya vikalpasyānantarōtpādanasamarthāvasthā prāpnotīty arthaḥ /  
 anyonyavaśād iti tathā hi cakṣurādivijñāna svaśaktiparipoṣe vartamānaṁ śaktiviśiṣṭasyālayavi  
 jñānapariṇāmasya nimittaṁ so 'pi ālayavijñānapariṇāmaḥ cakṣurādivijñānasya nimittaṁ bhavati /  
 evam anyonyavaśād /  
 yasmād ubhayaṁ pravartate tasmād ālayavijñānād anyenānadhṣṭhitād anekaprakāro vikalpaḥ sa sa  
 jāyate /  
 tatra ca vartamāne janmani yathālayavijñānāt pravṛttivijñānasyōtpattir bhavati tathākhyātaṁ /  
 idānīm vijñaptimātre anāgataṁ janma vartamānajanmanirodhe sati yathā pratisaṁdhiyate tat  
 pradarśayann āha /  
 karmaṇo vāsanā grāhadvayavāsanayā saha /  
 kṣiṇe pūrvavipāke 'nyadvipākaṁ janayanti tat // K.19 //  
 iti /  
 puṇyāpuṇyāneñjyacetanā karma /

tena karmaṇā yad anāgatātmbhāvābhinirvṛttaye-ālayavijñāne sāmāthyam āhitaṁ sā karmavāsānā /  
 grāhadvayaṁ, grāhyagrāho grāhakagrāhāś ca /  
 tatra vijñānāt pṛthageva svasam̐tānādhyāsitaṁ grāhyam astīty adhyavasāyo grāhyagrāhaḥ /  
 tacca vijñānena pratīyate vijñāyate gr̥hyata iti yo 'yaṁ niścayaḥ sa grāhakagrāhaḥ /  
 pūrvōtpannagrāhyagrāhakagrāhākṣiptam anāgatatajjātiyagrāhyagrāhakagrāhōtpattibijaṁ  
 grāhadvayavāsānā /  
 tatra karmavāsānābhedād gatibhedenātmbhāvabhedaḥ bījabhedād aṅkurabhedavat /  
 grāhadvayavāsānāyās tu sarvakarmavāsānānāṁ yathāsvam ākṣiptātmbhāvōtpādane (p. 37)  
 pravṛttānāṁ sahakāritvaṁ pratipadyate /  
 tad yathābādayo 'ṅkurasyōtpattāv iti /  
 evaṁ ca na kevalāḥ karmavāsānā grāhadvayavāsānānanugṛhītā vipākāṁ janayantīty uktaṁ bhavati /  
 ata evāha / grāhadvayavāsānāyā sahēti /  
 kṣiṇe pūrvavipāke 'nyadvipākāṁ janayanti tad iti pūrvajanmōpacitena karmaṇā ya iha vipāko  
 'bhinirvṛttas tasmin kṣiṇe iti /  
 ākṣepakāle paryantāvasthite yathābalaṁ karmavāsānā grāhadvayavāsānāsahi tā upabhuktād  
 vipākād anyadvipākāṁ tad evālayavijñānaṁ janayanti /  
 ālayavijñānavyatirekeṇānyasya vipākasyābhāvāt /  
 kṣiṇe pūrvavipāka ity anena śāsvatāntaṁ pariharati /  
 anyadvipākāṁ janayantīty ucchedāntaṁ //  
 cakṣurādivijñānavyatiriktam ālayavijñānam asti /  
 tadeva ca sarvabījakaṁ na cakṣurādivijñānam iti /  
 kuta etat / āgamād yuktitaś ca / uktaṁ hi bhagavatābhīdharmasūtre /  
 anādikāliko dhātuḥ sarvadharmasamāśrayaḥ /  
 tasmin sati gatiḥ sarvā nirvānādhighamo 'pi vā // (mahāyānābhīdharmasūtra)  
 na cālayavijñānam antareṇa saṁsārapravṛttir nivṛttir vā yujyate /  
 tatra saṁsārapravṛttir nikāyasabhāgāntareṣu pratisaṁdhibandhaḥ /  
 nivṛtṭiḥ sōpadhiśeṣo nirupadhiśeṣaś ca nirvāṇadhātuḥ /  
 saṁskārapratyayavijñānābhāve pravṛtṭer apy abhāḥ saṁsārasya /  
 ālayavijñānānābhyupagame pratisaṁdhivijñānaṁ vā saṁskārapratyayaṁ parikalpyeta saṁskāraparibhāvitā  
 vā ṣaḍvijñānakāyāḥ /  
tatra ye (tatrême) saṁskārāḥ prātisaṁdhikavijñānapratyayatve nēṣyante /  
 teṣāṁ ciraniruddhatvāt /  
 niruddhasyacāsatvāt asataś ca pratyayatvābhāvāt /  
 na saṁskārapratyayaṁ pratisaṁdhivijñānaṁ yujyate /  
 pratisaṁdhau ca nāmarūpam apy asti na kevalaṁ vijñānaṁ /  
 tatra vijñānam eva saṁskārapratyayaṁ na nāmarūpam iti kā tatra yuktiḥ /  
 tasmāt saṁskārapratyayaṁ nāmarūpam iti vaktavyaṁ /

na tu vijñānam iti /  
katamad anyavijñānapratyayaṃ nāmarūpaṃ /  
yad utarakālam iti cet tasya prāṭisamdhikanāmarūpāt ka (p. 38) ātmātīśayaḥ  
yatas tadeva vijñānapratyayaṃ na pūrvaṃ pūrva ca saṃskārapratyayaṃ nōttaram iti /  
ataśca saṃskārapratyayaṃ nāmarūpam evāstu kiṃ pratisamdhivijñānenāṅgāntareṇa parikalpītena /  
tasmāna pratisamdhivijñāna saṃskārapratyayaṃ yujyate /  
saṃskāraparibhāvitā vā ṣaḍvijñānakāyā api na saṃskārapratyayaṃ vijñānaṃ yujyate /  
kiṃ kāraṇaṃ /  
na hi vijñānaṃ vipākavāsanāṃ niṣyandavāsanāṃ vā svātmany ādhattum samarthaṃ /  
svātmani kāritravirodhāt nāpy anāgate tasya tadānutpannatvāt /  
anutpannasya cāsatvāt /  
nāpy utpannapūrvasya(e 'sya) tadā niruddhatvāt /  
acittikāsu ca nirodhasamāpattyādyavasthāsu punaḥ saṃskāraparibhāvitacittōtpattiyasambhavāt /  
vijñānapratyayaṃ nāmarūpaṃ na syāt /  
(tadabhāvāt) ṣaḍāyatanaṃ na syāt /  
evaṃ yāvajjātipratyayaṃ jarāmaraṇaṃ na syāt/  
tataśca saṃsārapravṛttir eva na syāt tasmād avidyāpratyaḃyāḥ saṃskārāḥ tadadhivāsi  
cālayavijñānaṃ saṃskārapratyayaṃ vijñānaṃ /  
tatpratyaḃyayaṃ pratisamdhau nāmarūpam ity eśāiva nītir anavadyā /  
saṃsāranivṛttir api ālayavijñāne asati na yujyate /  
saṃsārasya hi karma kleśāśca kāraṇaṃ tayośca kleśāḥ pradhānaṃ /  
tathā hi kleśādhipatyatvāt karma punarbhavākṣepasamarthaṃ bhavati nānyathā /  
tathā ākṣiptapunarbhavo 'pi karmakleśādhipatyād eva punarbhavo bhavati nānyathā /  
evaṃ ca kleśā eva saṃsārapravṛtteḥ pradhānatvān mūlaṃ /  
atas teṣu prahīṇeṣu saṃsāro vinivartate nānyathā /  
na cālayavijñānam antareṇa tatprahāṇaṃ yujyate /  
kathaṃ punar na yujyate /  
saṃmukhībhūto vā kleśaḥ prahīyate bījāvastho vā /  
tatra saṃmukhībhūtaḥ prahīyata iti aniṣṭir evēyaṃ /  
tasya prahīṇamārgasthāyinām vā (sthitatvāt) /  
bījāvasth 'pi nāiva prahīyate /  
na hi pratipakṣāt tadānīm kiṃcid anyad abhyupagamyate yatra kleśabījaṃ vyavasthitaṃ tatpratipakṣeṇa  
prahīyeta /  
atha pratipakṣacittam eva kleśabījānuṣaktam iṣyate /  
na hi tat kleśabījānuṣaktam eva tatpratipakṣo bhavitum arhati /  
na cāprahīṇakleśabījānām saṃsāranivṛttiḥ sambhavati /  
tasmād avaśyam ālayavijñānaṃ tadanyavijñānasahabhūbhiḥ kleśōpakleśair bhāvyaṭe svabījapuṣṭyādānata

ity abhyupeyaṃ /

ye punaś cittata eva saṃtatipariṇāma viśeṣād yathābalaṃ vāsanāvṛttilābhe sati kleśopakleśāḥ pravartante teṣāṃ cālayavijñānavyavasthitaṃ bijaṃ tatsahabhuvā kleśapratipakṣamṛgeṇāpanīyate / tasmīṃs cāpanīte na punas tenāśrayeṇa kleśānāṃ utpattir iti sopadhiśeṣo nirvāṇadhātuḥ prāpyate / pūrvakarmākṣiptajanmanirodhe ca tato 'nyajanmāpratisaṃdhānān nirupadhiśeṣo nirvāṇadhātuḥ /

na hi karma vidyamānam api kleśeṣu saha kārīkāraṇābhāvāt (p. 39) punarbhavam abhinivartayituṃ samarthaṃ /

evam ālayavijñāne sati saṃsārapravṛttir nivṛttīś ca nānyathēty avasāyaṃ cakṣurādivijñānavyatiriktam ālayavijñānaṃ /

tadeva ca sarvadharmabījānugataṃ na cakṣurādivijñānam ity abhyupagantavyaṃ / vistaravicāras tu pañcaskandhakōpanibandhād veditavyaḥ //

yadi vijñaptimātram evēdaṃ kathaṃ na sūtravirodhaḥ /

sūtreṣu hi trayāḥ svabhāvā uktāḥ parikalpitaḥ paratantraḥ pariniṣpannāś ca / nāsti virodhaḥ /

vijñaptimātra eva sati svabhāvatrāyavyavasthānāt /

katham ity ata āha /

yena yena vikalpena yad yad vastu vikalpyate /

parikalpita evāsau svabhāvo na sa vidyate // K. 20 //

ādhyātmikabāhyavikalpyavastubhedena vikalpyānām ānantyaṃ pradarśayann āha /

yena yena vikalpenēti / yad yad vastu praklpyate /

ādhyātmikaṃ bāhyaṃ vāntaśo yāvād buddhadharmā api /

parikalpita evāsau svabhāva ity atra kāraṇam āha /

na sa vidyate iti /

yad vastu vikalpaviśayas tad yasmāt sattābhāvān na vidyate /

tasmāt tadvastu parikalpitasvabhāvam eva /

na hetupratyayapratipadyasvabhāvaṃ /

tathā hy ekasmin vastuni tadabhāve ca parasparaviruddhānekavikalpapravṛttir dṛṣṭā /

na ca tadekaṃ vastu tadabhāvo vā parasparaviruddhānekasvabhāvo yujyate /

tasmāt sarvam idaṃ vikalpamātram eva tadarthasya parikalpitarūpatvāt /

uktaṃ ca sūtre /

na khalu punaḥ subhūte dharmās tathā vidyante yathā bālapṛthagjanā abhimiviṣṭā iti / ata āha/

paratantrasvabhāvas tu vikalpaḥ pratyayōdbhavaḥ / 21. ab

atra vikalpa ity paratantrasvarūpam āha /

pratyayōdbhava ity anenāpi paratantrābhīdhānapravṛttinimittam āha /

tatra parikalpaḥ kuśalākuśalāvyaḥkṛtabhedabhinnās traidhātukāś cittacaittaḥ /

yathoktam /

abhūtaparikalpas tu cittacaittās traidhātukāḥ / (Daśabhūmika  
iti / parair hetupratyayais tantryata iti paratantra utpādyata ity arthaḥ /  
svato 'nyahetupratyayapratibaddhātmalābha iti yāvad uktam bhavati //  
uktaḥ paratantraḥ /  
pariniṣpannaḥ katham ity ata āha /

niṣpannas tasya pūrveṇa sadā rahitatā tu yā // K.21 cd  
(p. 40) avikārapariniṣpattyā sa pariniṣpannaḥ /

tasyēti paratantrasya pūrveṇēti parikalpitenā tasmin vikalpe grāhyagrāhakabhāvaḥ parikalpitaḥ /  
tathā hi tasmin vikalpe grāhyagrāhakatvam avidyamānam eva parikalpyata iti parikalpitam ucyate /  
tena grāhyagrāhakeṇa paratantrasya sadā sarvakālaṁ atyantarahitatā yā sa pariniṣpannasvabhāvaḥ //  
ata eva sa nāivānyo nānanyaḥ paratantrataḥ / K.22 ab

ata eva sa nāivēti parikalpitenā svabhāvena paratantrasya sadā rahitatā pariniṣpannaḥ /  
rahitatā ca dharmatā dharmatā dharmān nānyā nānanyā yujyate /  
pariniṣpannaśca paratantradharmatēty ataḥ paratantrāt pariniṣpanno nānyo nānanya iti bodhavyaḥ /  
yadi hi pariniṣpannaḥ paratantrād anyaḥ syād evaṁ na parikalpitenā paratantraḥ sūnyaḥ syāt /  
athānanya evam api pariniṣpanno na viśuddhyālabanaḥ syāt paratantravat saṁkleśātmakatvāt /  
evaṁ paratantraś ca na kleśātmakaḥ syāt /  
pariniṣpannād ananyatvāt pariniṣpannavat //

anityatādivad vācyo K.22 c  
nānyo nānanya iti vākyaśeṣaḥ /

yathā hy anityatā duḥkhatānātmatā ca saṁskārādibhyo nānyā nānanyā /  
yadi saṁskārebhyo 'nityatā anyā /  
evaṁ tarhi saṁskārā nityāḥ syuḥ /  
athānanyā evam api saṁskārāḥ pradhvaṁsābhāvarūpāḥ syuḥ anityatāvat /  
evaṁ duḥkhatādiṣv api vācyam //

yadi grāhyagrāhakabhāvarahitaḥ paratantraḥ katham asau gr̥hyate agr̥hyamāṇo vā katham astīti  
vijñāyate / ata āha /

nādr̥ṣṭe 'smin sa dr̥śyate // K.22 d

nādr̥ṣṭe 'smin ity pariniṣpannasvabhāve sa dr̥śyata iti paratantraḥ svabhāvaḥ /  
nirvikalpalokottarajñānadr̥śye pariniṣpanne svabhāve adr̥ṣṭe apratividdhe asāksātkr̥te tatpr̥ṣṭhalabd  
haśuddhalaukikajñānagamyatvāt paratantra 'nyena jñānena na gr̥hyate /  
ataḥ pariniṣpanne adr̥ṣṭe paratantra na dr̥śyate /  
na punar lokottarajñānapr̥ṣṭhalabdhenāpi jñānena na dr̥śyate /  
yathā nirvikalpapraveśāyām dhāraṇyām uktam /  
tatpr̥ṣṭhalabdhenā jñānena māyāmarīcisvapnapratiśrutkôdakacandranirmitasamān sarvadharmān  
pratyētīti /

atra ca dharmāḥ paratantrasaṅgrhītā abhipretāḥ /  
 pariniṣpannāś cākāśavad ekarasah jñānam ca yathoktaṁ nirvikalpyena (p. 41) jñānenākāśasamatāyām  
 sarvadharmān paśyatīti paratantradharmāṅām tathatāmātradarśanāt //  
 yadi dravyam eva paratantraḥ katharṁ sūtre sarvadharmā niḥsvabhāvā anutpannā aniruddhā iti  
 nirdiśyante /  
 nāsti virodhaḥ yasmāt /  
     trividhasya svabhāvasya trividhām niḥsvabhāvatām /  
     saṁdhāya sarvadharmāṅām deśitā niḥsvabhāvatā // K.23 //  
 traya eva svabhāvā na caturtho 'stīti jñāpanārthaṁ saṁkhyānirdeśaḥ /  
 svena svena lakṣaṇena vidyamānavad bhavatīti svabhāvaḥ /  
 trividhā niḥsvabhāvatā lakṣaṇaniḥsvabhāvatā utpattiniḥsvabhāvatā paramārthaniḥsvabhāvatā ca /  
 sarvadharmāḥ parikalpitaparatantrapariniṣpannātmakāḥ //  
 idānīm trividhasya svabhāvasya yā yasya niḥsvabhāvatā tām tasya pradarśayann āha /  
     prathamo lakṣaṇenāiva niḥsvabhāyo 'paraḥ punaḥ /  
     na svayāmbhāva etasyēty aparā niḥsvabhāvatā // K.24 //  
     dharmāṅām paramārthaś ca sa yatas tathatāpi saḥ / K.25 ab  
 prathamah parikalpitaḥ svabhāvaḥ ayaṁ ca lakṣaṇenāiva niḥsvabhāvaḥ tallakṣaṇasyōtpreṣitatvāt /  
 rūpaṅālakṣaṇaṁ rūpaṁ anubhavalakṣaṇā vedanētyādi /  
 ataś ca svarūpābhāvāt khapuṣpavat svarūpenāiva niḥsvabhāvaḥ /  
 aparah punar iti paratantrasvabhāvaḥ /  
 na svayāmbhāva etasya māyāvat parapratyayenōtpatteḥ /  
 ataś ca yathā prakhyāti tathāsyōtpattir nāstīti ato 'sya utpattiniḥsvabhāvatēty ucyate /dharmāṅām  
 paramārthaś ca sa yatas tathatāpi sa iti paramaṁ hi lokottarajñānam niruttaratvāt tasyārthaḥ  
 paramārthaḥ /  
 atha vā ākāśavat sarvatrāikarasārthena vaimalyāvīkārārthena ca pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ  
 paramārtha ucyate /  
 sa yasmāt pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ sarvadharmāṅām paratantrātmakānām paramārthaḥ  
 taddharmatēti kṛtvā tasmāt pariniṣpanna eva svabhāvaḥ paramārthaniḥsvabhāvatā pariniṣpannasyāb  
 hāvasvabhāvatvāt /  
 kim punaḥ paramārthābhīdhānenāiva pariniṣpanno 'bhīdhātavyaḥ /  
 nēty āha / kimtarhi tathatāpi saḥ /  
 apīśabdān na kevalaṁ tathatāśabdenāivābhīdhātavyaḥ /  
 kim tarhi yāvanto dharmadhātuparyāyāḥ sarvais tair apy abhīdhātavya iti //  
     sarvakālaṁ tathābhāvāt K.25 c  
 tathatā / tathā hi pṛthagjanaśaikṣyaśaikṣāvasthāsu sarvakālaṁ tathāiva bhavati /  
 nānyathēti tathatēty ucyate //  
 kim punas tathatā tatpariniṣpanna eva vijñaptimātratā /

utānyā vijñaptimātratā / ata āha /

saiva vijñaptimātratā // K.25 d //

ativisuddhalakṣaṇāvabodhād yathoktaṁ /

nāmnī tiṣṭhāti taccittaṁ tadā tanmātradarśanāt /

nāmnī sthānācca vijñaptāv upalambhaḥ prahīyate //

nōpalambhaṁ tadā dhātum spr̥ṣate bhāvanānvayāt /

sarvāvaraṇavimokṣaṁ vibhutvaṁ labhate tadā //

iti / s̥aiva vijñaptimātratēty anena vacanenābhisamaya uktaḥ //

yadi vijñaptimātram evēdam kasmāc cakṣuḥśrotraghrāṇajihvākāyai rūpaśabdagandharasasparśān  
gr̥hṇātīty ata āha /

yāvad vijñaptimātratve vijñānaṁ nāvatiṣṭhāti /

grāhadvayasyānuśayas tāvanna vinivartate // K.26 //

atha vā yās tāḥ karmavāsanā grāhadvayavāsanāsahitāḥ kṣiṇa pūrvavipāke 'nyadvipākaṁ janayantīty  
uktaṁ tasmāt kathaṁ prahāṇam aprahāṇaṁ cētyata āha /

yāvadvijñaptimātratve vijñānaṁ nāvatiṣṭhāti iti vistarahaḥ /

yāvac cittadharmatāyām vijñaptimātrasamśabdītāyām vijñānaṁ nāvatiṣṭhāti kim tarhi  
grāhyagrāhakōpalambhe carati /

grāhadvayaṁ grāhyagrāho grāhakagrāhaś ca /

tasyānuśayas tadāhitam anāgatagrāhadvayōtpattaye bijam ālayavijñāne /

yāvad advayalakṣaṇe vijñaptimātre yoginaś cittaṁ na pratiṣṭhitaṁ bhavati, tāvad grāhyagrāhakānuśayo  
na vinivartate na prahīyate ity arthaḥ /

atra ca bahirupalambhāprahāṇenādhyātmikōpalambhāprahāṇaṁ darśitam iti /

ato 'syāivam bhavati ahaṁ cakṣurādibhiḥ rūpādīn gr̥hṇāmīti /

idam idānīm vaktavyaṁ kim artharahitacittamātrōpalambhāt cittadharmatāvasthānaṁ nēty āha  
kim tarhi /

vijñaptimātram evēdam ity api hy upalambhataḥ /

sthāpayann agrataḥ kiṁcid tanmātre nāvatiṣṭhate // K.27 //

(p. 43) iti /

atha vā yaḥ punarābhimānikaḥ śrutamātrakeṇa jānīyād ahaṁ vijñaptimātratāyām śuddhāyām sthita  
iti tadgrāhavyudāsārtham āha /

vijñaptimātrān evēdam ityapi hy upalambhata ityādi /

vijñaptimātram evēdam artharahitaṁ na bāhyo 'rtho 'stīti evam upalambhato grahaṇataḥ  
citrīkaraṇata ity arthaḥ /

agrata ity abhimukhaṁ /

sthāpayann iti yathāśrutaṁ manasā /

bahuprakāratvād yogācārālambanānām kiṁcid ity āha /

asthisamkalikaṁ vā nīlakaṁ vāpi pūyakaṁ vā vipaḍumakaṁ vā vyādhmātakādikaṁ vā tanmātre



nâvatiṣṭhate vijñānôpalambhâprahāṇāt //

kadā punar vijñānagrāhasya prahāṇam cittamātratāyām vā pratiṣṭhito bhavatīty ata āha

yadā tv ālambanam vijñānam nâivôpalabhate tadā /

sṭhitam vijñānamātratve grāhyâbhāve tadagrahāt // K.28 //

iti /

yasmin kāle deśanâlambanam avavādâlambanam prākṛtam vā rūpaśabdâdyâlambanam (vi)jñānam

bahiscittāt nôpalabhate na paśyati na gr̥hṇāti nâbhinivisate /

yathâbhûtârthadarśanāt na tu jâtyandhavat /

tasmin kāle vijñānagrāhasya prahāṇam svacittadharmatāyām ca pratiṣṭhito bhavati / atrâiva kâraṇam

āha /

grāhyâbhāve tadagrahād iti /

grāhye sati grāhako bhavati na tu grāhyâbhāva iti /

grāhyâbhāve grāhakâbhāvam api pratipadyate /

na kevalam grāhâbhāvam /

evam hi samasamâlambyâlambakam nirvikalpaṁ lokottaram jñānam utpadyate /

grāhyagrāhakâbhiniveśānuśayāḥ prahīyante svacittadharmatāyām ca cittam eva sṭhitam bhavati //

yadâivam vijñaptimātratāyām cittam avasthitam bhavati /

tadā katham vyapadiśyata ity āha /

acitto 'nupalambho 'sau jñānam lokottaram ca tat /

āśrayasya parāvṛttir dvidhādauṣṭhulyahānitaḥ // K.29 //

sa evânāsravo dhātur acintyaḥ kuśalo dhruvaḥ /

sukho vimuktikāyo 'sau dharmākhyo 'yam mahāmuneḥ // K.30 //

(p. 44) iti /

tadanena ślokadvayena darśanamārgam ārabhyôttaraviśeṣagatyā phalasaṁpattir udbhāvitā

vijñaptimātrapraṭiṣṭayoginaḥ /

tatra grāhakacittâbhāvāt grāhyârthânupalambhāc ca /

acitto 'nupalambho 'sau anucitatvāt loka samudācārâbhāvāt /

nirvikalpatvācca lokād uttīrṇam iti jñānam lokottaram ca tad iti /

tasya jñānasyânantarâśrayasya parāvṛttir bhavatīti jñāpanârtham āha /

āśrayasya parāvṛttir iti / āśayo 'tra sarvabījakam ālayavijñānam /

tasya parāvṛttir yā dauṣṭhulyavipākadvayavāsanâbhāvena nivṛttau satyām karmaṇyatādharmakāyād

vayajñānabhāvena parāvṛtṭiḥ /

sā punar āśrayaparāvṛtṭiḥ kasya prahāṇāt prāpyate /

ata āha /

dvidhādauṣṭhulyahānitaḥ dvidhêti kleśâvaraṇadauṣṭhulyam jñeyâvaraṇadauṣṭhulyam ca /

dauṣṭhulyam āśrayasyâkarmaṇyatā /

tat punaḥ kleśajñeyâvaraṇayor bījam /

sã punar āśrayaparāvṛtṭiḥ śrāvakādigatadauṣṭhulyahānitaś ca prāpyate /  
 yadāha /  
 vimuktikāya iti /  
 bodhisattvagatadauṣṭhulyahānitaś ca prāpyate /  
 yadāha /  
 dharmākhyo 'yaṁ mahāmuner iti dvidhā āvaraṇabhedena sōttarā niruttarā ca āśrayaparāvṛtṭir uktā /  
 atra gāthā /  
     jñeyam ādānavijñānaṁ dvayāvaraṇalakṣaṇam /  
     sarvabijam kleśabijam bandhas tatra dvayor dvayoḥ //  
 iti / dvayam iti śrāvakabodhisattvayoḥ /  
 ādyasya kleśabijam itarasya dvayāvaraṇabijam tadudghātāt sarvajñatāvāptir bhavatīti /  
 sa evānāsravo dhātur iti sa evāśrayaparāvṛtṭirūpaḥ anāsravo dhātur ity ucyate nirdauṣṭhulyatvāt /  
 sa tv āsravavigata ity anāsravaḥ /  
 āryadharmahetutvād dhātuḥ / hetvartho hy atra dhātuśabdaḥ /  
 acintyas tarkāgocaratvāt pratyātmavedyatvād dṛṣṭāntābhāvāc ca /  
 kuśalo viśuddhālambanatvāt kṣematvāt anāsravadharmamayatvāc ca /  
 dhruvo nityatvāt akṣayatayā /  
 sukho nityatvād eva yad anityam tadduḥkham ayaṁ ca nitya iti /  
 asmāt sukhaḥ /  
 kleśāvaraṇaprahāṇāt śrāvakānām vimuktikāyaḥ /  
 sa evāśrayaparāvṛtṭilakṣaṇo dharmākhyo 'py ucyate, rnahāmuner bhūmipāramitādibhāvanayā  
 kleśajñeyāvaraṇaprahāṇāt /  
 āśrayaparāvṛtṭisamudāgamāt mahāmuner dharmakāya ity ucyate /  
 saṁsārāparityāgāt tadanupa (p. 45) kleśatvāt sarvadharmavibhutvalābhataś ca dharmakāya ity ucyate /  
 mahāmuner iti paramamaṇeyayogāt buddho bhagavān mahāmunir iti //  
     trimsīkāvijñaptibhāṣyam samāptaṁ //  
     kṛtir ācāryasthīramateḥ //